島根大学考古学研究室調査報告第６冊

石ヶ坪遺跡

発掘調査概報Ⅲ

２００５

島根大学法文学部考古学研究室

島根大学考古学研究室調査報告第６冊

石ヶ坪遺跡

発掘調査概報Ⅲ

２００５

島根大学法文学部考古学研究室

序

西日本の縄文時代を語る上で、重要な研究課題の一つに「縄文農耕」論がある。中でも山陰地方、特に島根県における「縄文農耕」関係の資料の増加には著しいものがある。これらの資料にはプラントオパール、石器の器種組成や使用痕、異系統土器の搬入状況など様々なものがあるが、それらの体系的な研究についてはまだ端緒についたばかりと言うことができ、「縄文農耕」の存在を実証することを含め、今後の研究の深化が全国的にも期待されているところである。

このような研究動向の中、島根大学考古学研究室では山陰地方における縄文時代の「農耕」のあり方、ひいては縄文時代以降の農耕文化の受容と展開について検討を加えるべく長期的な展望のもと、遺跡の発掘調査を中心とした研究活動を継続的に行なうことにした。その最初の調査地として選んだのが、島根県美濃郡匹見町（現 益田市匹見町）石ヶ坪遺跡である。

研究室では、匹見町および匹見町教育委員会（現益田市および益田市教育委員会）の御協力のもと、三年計画で石ヶ坪遺跡の発掘調査を行なってきた。本書はその第三回目の発掘調査の概報である。調査も三年目を迎え、遺跡や周辺の状況だけではなく、中国地方西部全体や九州地方を射程に入れた議論も行なうことが可能になりつつある。この成果は本報告書として結実させたい。

発掘調査並びに概報の作成は、大学院生および学部三年次生を中心として進められた。短期間で調査と概報の作成の両方を行なうにあたっては、並々ならぬ努力があったと思う。この経験を無駄にせず、発掘調査や各作業の意味をしっかり理解し、次につなげてほしい。

なお、調査中匹見町の方々には様々な御配慮を賜った。記して感謝したい。

2005年３月

島根大学考古学研究室
渡辺　貞幸
山田　康弘

例　　言

(1)　本書は島根県美濃郡匹見町（現益田市匹見町）大字紙租に所在する石ヶ坪遺跡の第５次調査概報である。

(2)　発掘調査は2003年８月18日から９月１日にかけて実施した。

(3)　発掘調査は島根大学法文学部考古学研究室が行なった。

(4)　本書では建物跡を「SB」、柱穴を「P」、土坑を「SK」と表記する。

(5)　土層の色調については小山正忠・竹原秀雄編集、農林水産省農林水産科学技術会議事務局監修、日本色研事業株式会社発行の『標準土色帖（1993年版）』を使用した。

(6)　出土品の整理作業と報告書作成の諸作業には考古学専攻の大学院生および学部生があたり、作業の一部は島根大学法文学部の授業科目「考古学実習Ⅱ」の一環として行なった。

(7)　発掘調査及び整理作業の参加者は以下の通りである。

発掘調査：渡辺貞幸（法文学部教授）、山田康弘（法文学部助教授）、厚見　崇（大学院１年次）、池田恵理、佐海由美子、高畑あゆみ、三谷早希子、山中将士、油利　崇（以上３年生）、片山尚子、客野祐治、鈴木小織、中村佳珠、中村倫子、百田　麻、山中　玲（以上２年生）

整理作業：厚見　崇、池田恵理、佐海由美子、高畑あゆみ、三谷早希子、山中将士、油利　崇、片山尚子、客野祐治、鈴木小織、中村佳珠、中村倫子、百田　麻、山中　玲

(8)　発掘調査でのフィールドマスターは厚見　崇が担当した。

(9)　執筆担当は文末に示しており、本書の編集は山田康弘と厚見　崇が行なった。

(10)　出土遺物および記録図面・写真はすべて島根大学法文学部考古学研究室に保管されている。

(11)　調査および本書の作成にあたって、匹見町町長・教育長をはじめとして匹見町の全面的な御協力をいただいた。また次の諸氏、諸機関より御教示・御協力を賜った。記して謝意を表したい。（敬称略、順不同）

渡辺友千代、栗田美文、山本浩之（以上匹見町教育委員会）、會下和宏（島根大学埋蔵文化財調査研究センター）、藤原惠吉（島根大学）、中村友博（山口大学人文学部）、今岡照喜（山口大学理学部）、山中　章（三重大学人文学部）、坂本豊治（出雲市芸術文化振興課）、樋口英行（広島大学大学院文学研究科博士課程前期）、上田妙子、斉藤ソノ、西岡和子、西岡安乃、宮市美佐子、森久枝（以上雪舟山荘）

本　文　目　次

第一章　序論
　　１．遺跡の位置と環境 …… 1
　　２．過去の調査の概要 …… 4
第二章　調査の概要
　　１．目的と経過 …… 10
　　２．基準土層 …… 12
　　３．遺構の検出状況および遺物の出土状況 …… 14
第三章　出土遺物
　　１．縄文土器 …… 16
　　２．土製品 …… 32
　　３．石器 …… 34
第四章　考察
　　１．遺構について …… 40
　　２．遺物について …… 40
第五章　まとめ …… 44

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　調査区位置図 …… 5～6
第３図　調査区および遺構配置図 …… 11
第４図　調査区北東壁および南東壁セクション図 …… 13
第５図　柱穴および土坑実測図 …… 15
第６図　出土土器実測図（１） …… 17
第７図　出土土器実測図（２） …… 21
第８図　出土土器実測図（３） …… 25
第９図　出土土器実測図（４） …… 27
第10図　出土土器実測図（５） …… 29
第11図　出土土器・土製品実測図 …… 33
第12図　出土石器実測図（１） …… 35
第13図　出土石器実測図（２） …… 37
第14図　出土石器実測図（３） …… 39

図　版　目　次

図版１　上　遺跡遠景（北側より）　下　遺跡近景（南東側より）
図版２　上　調査区設定状況（南東側より）　下　調査区全景（南東側より）
図版３　上　調査区北東壁セクション（南西側より）　下　調査区南東壁セクション（北西側より）
図版４　上　遺構検出状況（南西側より）　下　遺構完掘状況（南西側より）
図版５　上　SK－01検出状況（南西側より）　下　SK－01完掘状況（南西側より）
図版６　上　出土土器（１）　下　出土土器（２）
図版７　上　出土土器（３）　下　出土土器（４）
図版８　上　出土土器（５）　下　出土土器（６）
図版９　上　出土土器（７）　下　出土土器（８）
図版10　上　出土土器（９）　下　出土土器（10）
図版11　上　出土土器（11）　下　出土土器・土製品
図版12　上　出土石器（１）　下　出土石器（２）
図版13　上　出土石器（３）　下　出土石器（４）

第一章　序　　論

1．遺跡の位置と環境

石ヶ坪遺跡は、島根県美濃郡匹見町（現益田市匹見町）大字紙祖に位置する（第１図）。本遺跡は紙祖川右岸の河岸段丘上に立地しており、南東側のすぐそばまで中国山地が迫っている。紙祖川の上流の地点では小原川が、下流の地点では匹見川が合流し、その紙祖川や匹見川にはヤマメ、アマゴなどが生息している。このように河川の合流する地点は魚類がよく集まるため、漁場としては最適である。また、匹見町はその面積の96％を山林に占められており、山々にはクリ、トチといった落葉樹林が生い茂り、ツキノワグマやイノシシなどの動物が生息している。このようにこの地域は、狩猟・漁撈・植物採集に適したところといえるだろう。

また、当地域の特徴として中国山地の南西に延びる尾根に沿って移動すれば山口方面へぬけることができるという点がある。本遺跡の第１次～第４次調査では、九州系の縄文土器である並木式、阿高式土器や大分県姫島産の黒曜石製の石器類が出土しており、九州との交流が指摘されている（渡辺編1990・2000、山根・樋口編2002、山田編2003）。このような九州との交流の際には、山口県を経由して中国山地をぬけるルートを用いたと考えられる。また、本遺跡の南西側には、益田氏の居城であった小松尾城跡が遺跡として残っており、このことからも、この地域が古くから交通の要所であったことがうかがえる。

町内のほかの遺跡についてみてみよう。本遺跡をはじめとしたこの地域の縄文時代遺跡のほとんどは、河川の合流する地域の周辺に延びる狭長な河岸段丘上に立地しているといえる。本遺跡の下流にある水田ノ上遺跡（渡辺編1991）は縄文時代後期から晩期にかけての遺跡であるが、ここからは墓あるいは祭祀場とされる配石遺構が検出されている。この配石遺構は環状列石状のものと考えられ、西日本には類例のみられないものである。遺物では、石製勾玉、硬玉製管玉といった装身具類、土偶、円盤形線刻土製品などの呪術具が出土していることが注目される。水田ノ上遺跡と同様に配石遺構が検出されている遺跡には、ヨレ遺跡（渡辺・矢野編1993）、中ノ坪遺跡（渡辺・栗田編1999）などがある。ヨレ遺跡の場合、縄文時代後期後葉から晩期前葉につくられたものと推定されており、祭祀の場と考えられている。ここでは鳥形土製品などの呪術具が出土していることも注目されている。本遺跡の上流に位置している中ノ坪遺跡のものは、縄文時代前期前半の墓群と考えられている。石ヶ坪遺跡の第１次・第２次調査においても、縄文時代後期初頭の配石遺構が検出されている。匹見町の北東の匹見川上流域には、新槇原遺跡（松本編1987）や田中ノ尻遺跡（渡辺編1997）が所在している。新槇原遺跡では縄文時代早期から中期にかけての遺物が出土しただけでなく、旧石器時代に属すると思われる削器類が表採されている。田中ノ尻遺跡では縄文時代早期の集石炉が検出され、縄文時代前期の轟式、曽畑式といった九州系の縄文土器が出土している。同様の九州系土器は中ノ坪遺跡でも見つかっている。このように、匹見町の縄文遺跡は、縄文時代の精神生活や、九州との交流を考える上で重要な資料を提供しているといえるだろう。

続いて、弥生時代の遺跡についてみてみよう。立地については、縄文時代に引き続き、河岸段丘に位置しているものが多い。本遺跡の下流、水田ノ上遺跡の近くに位置する長通遺跡（渡辺編1998）も

河岸段丘に位置しているが、弥生時代のピット、土坑、竪穴住居址が検出されている。また、水田ノ上遺跡の南側の一角にあたる槍田地区では、細形銅剣あるいは銅戈と考えられる武器形青銅製品の先端部が出土した（松本・岩永1991）。ここでは、弥生土器が採集されていないことから、青銅器の埋納があったと考えられている。下手遺跡（渡辺編1993）では弥生時代前期後葉から中期中葉の土器を共伴する配石遺構群が検出されている。これについては墓地や祭祀場、といった推定がなされているが、それを裏づける骨片や呪術的遺物は出土していない。このほか、前田遺跡、筆田遺跡、木戸開中遺跡、塚田遺跡、江田平台遺跡、平田遺跡、ヨレ遺跡、イセ遺跡など、多数の遺跡が平地の多い匹見町中心部に集中している。匹見町では縄文時代に続き、弥生時代においても複雑な文化様相が想定される。

古墳時代以降の遺跡についてみていくと、古墳時代には和田古墳、野入古墳、牛首古墳などが存在しているが、これらは山丘の尾根上や山裾部に立地していて、小規模なものが多い。本遺跡の下流にある長グロ遺跡（渡辺編1991）は、奈良～平安時代の集落跡で、竪穴住居址や土坑が検出され、須恵器、土師器、石錘といった遺物が出土した。これらの検出状況から、長グロ遺跡は農村集落と推定されている。同じく本遺跡の下流にある下正ノ田遺跡（渡辺編1991）は、縄文時代から平安時代までの複合遺跡であるが、7世紀後半から8世紀後半の住居址と考えられる溝状遺構が検出されている。このほかに中世のものでは、製鉄遺跡や山城が多く存在している。

以上、概観してきたように、匹見町は山間部ではあるが多数の遺跡が存在している。周辺は自然が豊かであり、交通の要所でもあったため、古くから生活の場として利用されてきたといえるであろう。

（池田　恵理）

引用文献

松本岩雄編 1987『新槙原遺跡発掘調査報告書』匹見町教育委員会

松本岩雄・岩永省三 1991「島根県美濃郡匹見町出土の青銅器」渡辺友千代編『水田ノ上A遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡』匹見町教育委員会

山田康弘編 2003『石ヶ坪遺跡発掘調査概報Ⅱ』島根大学法文学部考古学研究室

山根　航・樋口英行編2002『石ヶ坪遺跡発掘調査概報Ⅰ』島根大学法文学部考古学研究室

渡辺友千代編 1990『石ヶ坪遺跡』匹見町教育委員会

渡辺友千代編 1991『水田ノ上A遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡』匹見町教育委員会

渡辺友千代編 1993『下手遺跡発掘調査報告書』匹見町教育委員会

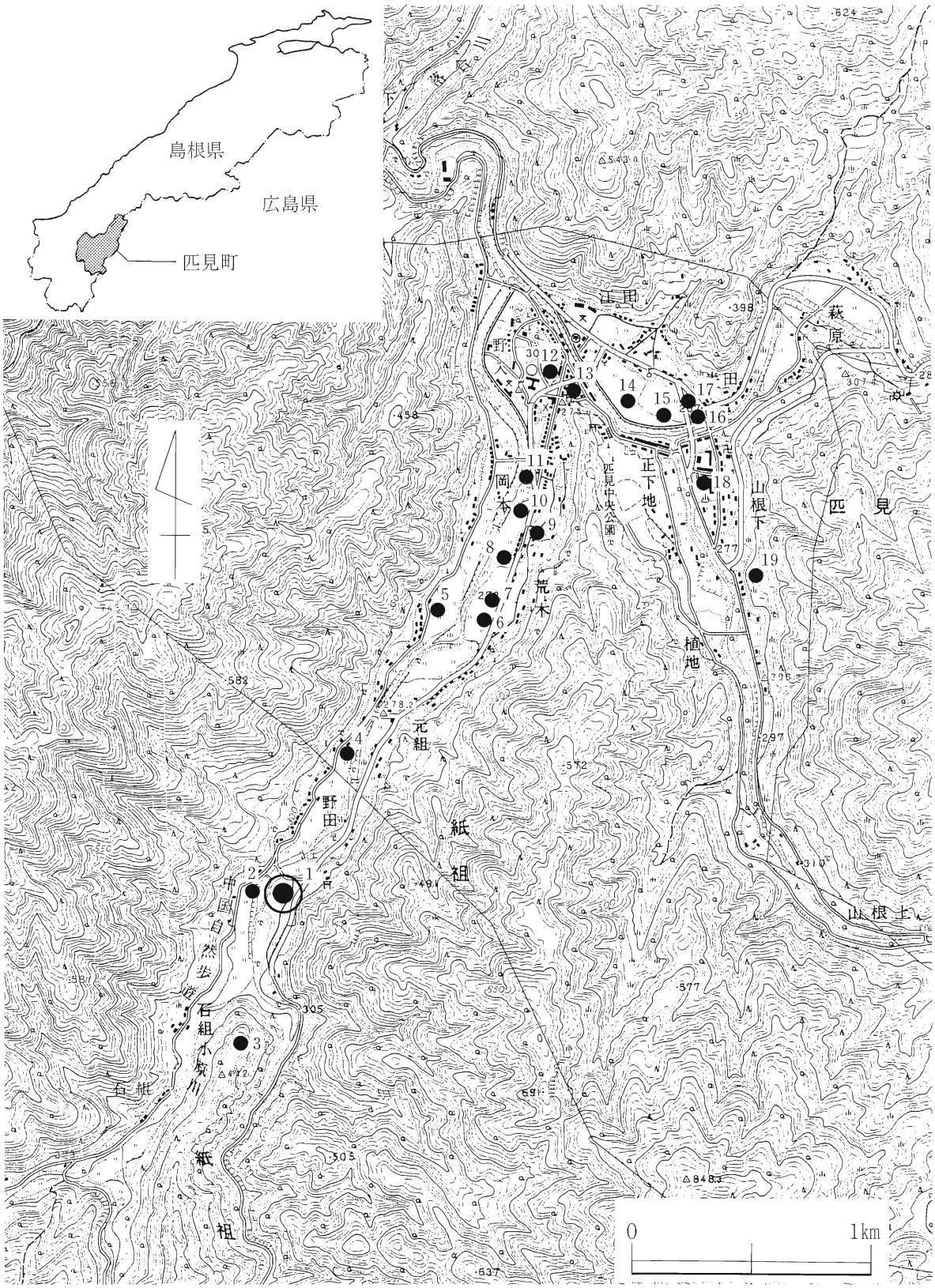
渡辺友千代編 1997『田中ノ尻遺跡』匹見町教育委員会

渡辺友千代編 1998『長通遺跡』島根県匹見町教育委員会

渡辺友千代編 2000『石ヶ坪A遺跡』匹見町教育委員会

渡辺友千代・栗田美文編 1999『中ノ坪遺跡』匹見町教育委員会

渡辺友千代・矢野健一編 1993『ヨレ遺跡・イセ遺跡・筆田遺跡』匹見町教育委員会



1．石ヶ坪遺跡　2．森ノ前遺跡　3．小松尾城址　4．前田遺跡　5．善正町遺跡　6．長グロ遺跡　7．銅戈出土地
8．水田ノ上遺跡　9．下正ノ田遺跡　10．長通遺跡　11．石仏頭遺跡　12．諏訪城址　13．神田遺跡　14．筆田遺跡
15．ヨレ遺跡　16．イセ遺跡　17．門田遺跡　18．下手遺跡　19．和田古墳

第１図　遺跡位置図

2．過去の調査の概要

石ヶ坪遺跡では、現在までに匹見町教育委員会による２回の発掘調査と、島根大学考古学研究室による２回の学術調査が行なわれている。第１次・第２次調査については報告書（渡辺編1990・2000）が、第３次・第４次調査については概報（山根・樋口編2002、山田編2003）が刊行されている。今回の調査は第３次・第４次調査に引き続き、島根大学考古学研究室の調査として行なわれたものである。ここではこれらの文献に基づきながら、過去の調査とその成果を概観してみることにする。また、今回の調査で引き続き行なった遺跡周辺の測量が終了し、今まで明確ではなかった過去の調査区との位置関係がほぼ確定したので、調査区の位置図を示しておく（第２図）。

第１次調査

1989年４月10日から同年７月31日までの期間で実施された。調査面積は約1,240㎡で、Ａ区～Ｈ区までの調査区が設定された。この調査では土層が１層～５層まで確認された。調査の途中で遺跡の保存が決定したため、完掘されたのはＦ２区のみとなり、他の区では遺物包含層の調査は行なわれていない。紙祖川の貫流により、全体に層位が乱れている区があるが、旧河道と想定されるところ以外の層序はほぼ水平となっている。

検出された遺構は住居址、土坑、溝状遺構、配石遺構、旧河川の河床礫などで、これらの多くは遺物包含層である３層中から検出されたものである。住居址は楕円形プランをもつもので、完掘されたＦ２区以外の調査区でも検出されている。また、配石遺構には石囲炉と推定されているものもある。

３層中からは多量の遺物が検出されているが、その中でも土器が大多数を占める。その土器の約５分の１を占めるのが在地の中津式土器で、他に九州系の並木式、阿高式の滑石混入土器、鐘崎式や小池原上層式といった土器が出土している。それに比較して、中津式土器に次ぐ福田ＫⅡ式土器の出土量は少ない。中津式土器と並木式土器は遺構内で共存しており、これらの時間的位置付けが問題となった。

第２次調査

1999年４月16日から同年９月30日までの期間で実施された。第１次調査区の東側にＡ区～Ｉ区までの調査区が設定されたが、Ｂ地区は調査されておらず、Ｈ地区は全面調査が行なわれた。この調査では削平などのため均一な堆積ではないが、土層が１層～７層まで確認された。出土した遺物から、１層・２層は近世、３層・４層上位は中世前半、４層下位・５層は縄文時代、という３つの文化層に分けられている。縄文時代のものには、中期、後期、晩期の各期にわたる遺物や遺構が検出されている。遺構には土坑、柱穴、配石遺構などがあり、中でも土坑には配石を伴うものとそうでないものの２種類があり、その性格の違いが推察されている。

出土した縄文土器は中津式土器が全体の７割強を占め、九州系の滑石混入土器も混じっており、その中には一部並木式が含まれている。石ヶ坪遺跡と同じ支流域にあり、石ヶ坪遺跡に何らかの影響を与えている可能性の指摘されている中ノ坪遺跡では、中期中葉に位置付けられる船元Ⅰ式・Ⅱ式が出土しているが、並木式はみられない。石ヶ坪遺跡では船元Ⅰ式・Ⅱ式は出土していない。このことから、並木式は船元式と並行するものではない、という見解が提示されている。

第３次調査

2001年８月20日から同年９月３日までの期間で実施された。調査面積は36㎡で、Ａ～Ｃ－１～３区の調査区が設定された。この調査では、九州系の縄文土器と在地の縄文土器との時間的関係を明らか

第２図　調査区位置図

にすること、配石遺構の時期および性格を明らかにすること、の２点に主要な目的がおかれた。また、この調査では土層が１層～５層まで確認されたが、過去の調査の遺物包含層は確認されず、遺物の出土量も少量にとどまった。

検出された遺構は縄文時代の土坑６基、柱穴状遺構９基で、遺構検出面は４層上面である。柱穴状遺構は第２次調査で検出された中世前半期の柱穴と同様の性格が考えられた。土坑は５基が精査され、そのうち４基が互いに切り合い、貯蔵穴と土坑墓両方の可能性が推察されている。残りの１基は掘り返したような状況が確認され、複葬の可能性をもつ土坑墓と考えられた。出土した遺物のほとんどは縄文土器で、時期は縄文時代晩期前半を中心としたものであるが、過去の調査のように九州系の土器は見つからなかった。しかし、九州方面との交流は姫島産黒曜石製剥片の出土によって確認された。今後、良好な遺物包含層を見つけること、遺存状態の良い遺構を見つけることが課題となった。

第４次調査

2002年８月19日から同年９月９日までの期間で実施された。第３次調査時に設定した調査区を基準として、I～L－16～18区、拡張区としてK～L－14～15区が設定された。調査面積は64㎡である。今回の調査の目的は、第３次調査と同じく、配石遺構の性格を明らかにすること、九州系の縄文土器と在地の縄文土器との時間的関係を明らかにすることである。この調査では土層が１層～８層まで確認され、４層～６層が遺物包含層にあたる。しかし、今回確認された層位は、水田耕作時の掘削や樹根による攪乱、紙祖川の貫流などにより、一次的な堆積層として残っている可能性が低いと思われた。

I～J－16～18区は第１次調査のＦ２区にあたる。K～L－14～15区では４層上面で土坑１基、柱穴状遺構３基、ピット数基が検出された。同区に設定されたサブトレンチからは土坑２基が検出され、この２基の土坑は土坑墓と推定された。その周囲にはまだ数基の土坑が存在した可能性があるが、調査期間の関係で未調査に終わった。また、K～L－16～18区では６層中から多量の礫群が検出された。

遺物は、土器や石器など大量に出土したが、土器は細片のものが多く、調査の目的の一つであった九州系の縄文土器と在地の縄文土器の時間的関係を確認するには至らなかった。しかし、第３次調査では出土しなかった並木式土器などの滑石混入土器が出土し、姫島産黒曜石を素材とした石鏃が出土したことから、九州地方との交流があったことをさらに補強することとなった。

今後の課題として、遺存状態のよい遺構をみつけること、引き続き配石遺構の様相を明らかにすること、九州系の縄文土器と在地の縄文土器との時間的関係を明らかにすることが課題となった。

（池田　恵理）

引用文献

山田康弘編2003『石ヶ坪遺跡発掘調査概報Ⅱ』島根大学法文学部考古学研究室

山根　航・樋口英行編2002『石ヶ坪遺跡発掘調査概報Ⅰ』島根大学法文学部考古学研究室

渡辺友千代編1990『石ヶ坪遺跡』匹見町教育委員会

渡辺友千代編2000『石ヶ坪Ａ遺跡』匹見町教育委員会

第二章　調 査 の 概 要

１．目的と経過

目的

今回の調査の目的はまず、第４次調査に引き続き、九州系の縄文土器と在地の縄文土器の時間的関係を明らかにすることである。

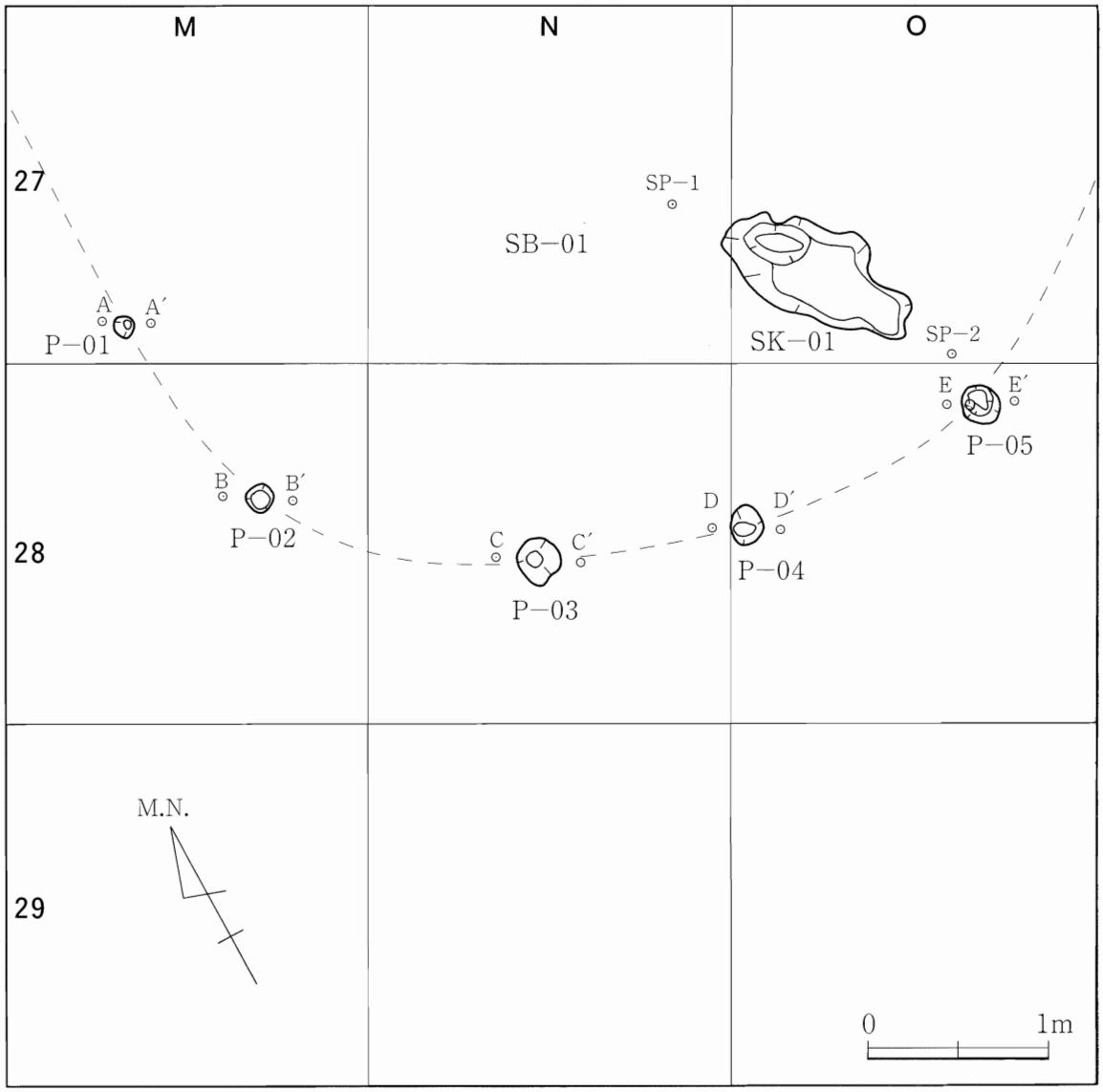
前章でも触れたように、石ヶ坪遺跡と中ノ坪遺跡での、九州系の縄文土器である並木式土器と在地の縄文土器である船元式土器の出土状況から、並木式土器が船元式土器並行ではない可能性が指摘されている。そして石ヶ坪遺跡では、縄文時代後期初頭とされる中津式土器と、縄文時代中期前葉とされる並木式土器や、後続する阿高式土器が同一の層内で共伴している。このことから、並木式土器が中期中葉に下り、阿高式土器もそれに伴い、中津式土器に接近するのではないかと言われている（渡辺編2000）。このような問題点から、今回の発掘調査では、これらの九州系と在地の縄文土器の共伴関係を明らかにすることを目的とした。

また、石ヶ坪遺跡の第１次調査では住居址が検出されている。今回は第１次調査区付近の発掘を行なって、住居址の床面から炭化種子等を検出することも目的とした。石ヶ坪遺跡は第１次と第２次調査における打製石斧の出土状況から縄文時代の「農耕」の可能性が示唆されており、当時の植物利用状況を炭化種子から確認することによって裏づけることができる可能性を含んでいるからである。

経過

石ヶ坪遺跡第５次発掘調査は2003年８月18日から同年９月１日にかけて行なわれた。発掘地点は第４次調査区の南側に位置し、発掘調査面積は36㎡である。調査区設定は、第３次調査で設定したグリッド分割を基準に行ない、それに従ったグリッド名を付した（第３図）。表土層である１層から２層はスコップによりまとめて掘り下げを行なった。３層より上層の遺物は一括して取り上げ、４層より下層の石器と２㎝以上の土器及び炭化物に関しては、１点ずつポイントを落として取り上げた。

８月18日に機材搬入を行ない、19日にベンチマークおよび調査区を設定した。当初予定していた調査区のＰ～Ｒ－29～31区は、東南端が湿地にかかって壁が崩れるおそれがあったため、第１次調査のＤ２区にかかるＭ～Ｏ－27～29区へ調査区を再設定して発掘した。まず過去の調査区との位置関係の確認のためＭ－27～29区を発掘したところ、第１次調査のＤ２区東南端と思われる部分の埋土が検出できた。そして20日は、範囲をＭ～Ｏ－27～29区全体に広げて調査を行なった。21日には３層が検出され、遺物が多く出土するようになった。22日には良好な包含層である４層が確認され、随時ポイントを落として遺物を取り上げながら、掘り下げていくこととなった。また、第１次調査のトレンチの掘方と、層位の確認のため、Ｍ－29区からＮ－29区へ長さ３ｍ、幅0.5ｍのサブトレンチを設定して掘り下げた。23日に遺構を検出した。Ｎ～Ｏ－27区から検出した土坑１基をＳＫ－01とし、Ｍ～Ｏ－27～28区に検出されたピット８基をＳＢ－01に伴う柱穴列とし、Ｏ－29区に検出された溝状遺構をＳＤ－01とした。24日は遺構の精査を行ない、ＳＫ－01とＳＤ－01は半截してから、ＳＢ－01に伴う柱穴列は１基を除いて半截せず完掘した。ＳＢ－01に伴う柱穴列のうち、樹根による攪乱と確認されたものを除外した６基を、それぞれ柱穴１～６とした。この段階では、柱穴５としたものの上部に人頭大の



第３図　調査区および遺構配置図

礫があることから、配石墓である可能性が考えられた。SD－01は不定形でセクションにも現れないことから、樹根による攪乱と判断した。27日にはN－29区で新たに柱穴が検出された。また、発掘調査と並行して遺跡周辺の地形測量を行なった。29日に第１次調査区から続くと思われる礫群がM～N－28～29区で検出された。N－29区で検出されていた柱穴は、樹根による攪乱であることが確認された。この日に地形測量が完了した。30日にはM～O－27～29区全体に５層上面が検出された。しかしその面で遺構は検出されなかった。柱穴５は礫の下に樹根が入り込んだ攪乱と確認された。31日に現地説明会を行ない、その後埋め戻し作業を行なった。９月１日に機材を撤収して、今回の発掘調査を終了した。

調査後、整理の過程で柱穴１～４と柱穴６をP－01～05とした。　（高畑　あゆみ）

引用文献

渡辺友千代編 2000『石ヶ坪Ａ遺跡』匹見町教育委員会

2．基準土層

今回設定した調査区は第１次調査のＤ２区に隣接する形に位置しており、過去の調査との対応関係を確認しながら調査していくことができた。

そこで、過去の調査における土層との対応関係をふまえて、以下に今回の調査の基準土層を示す（第４図、図版３）。

１ａ層：表土層である。Hue10YR3/3暗褐色土層。粒子は極小で粘性の弱いシルト質を呈している。第１次調査、第３次調査、第４次調査の１層に、第２次調査の１Ａ層に対応する。

１ｂ層：耕作土層である。Hue10YR3/2黒褐色土層。粒子は極小で粘性の弱いシルト質を呈している。第１次調査、第３次調査、第４次調査の１層に、第２次調査の１Ｂ層に対応する。

２層：耕作土層である。Hue10YR4/2灰黄褐色土層。粒子は極小で粘性の弱いシルト質を呈している。小礫を多く含む。第１次～第４次調査の２層に対応する。

３層：水田の床土である。Hue7.5YR4/6褐色土層。粒子は極小で粘性をもち、しまりがある。シルト質を呈し、全体に酸化鉄が含浸している。第１次調査との対応関係は不明であるが、第２次調査、第３次調査、第４次調査の３層に対応する。北東壁のＭ～Ｎ－27区では確認できなかった。

４層：遺物包含層である。Hue2.5YR3/2黒褐色土層。粒子は極小で粘性をもち、しまりがある。砂質で、酸化鉄がブロック状に含浸している。今回の調査ではこの層の上面で遺構が検出され、多くの遺物もこの層から出土している。第１次調査の３層、第２次調査の５層、第４次調査の４層・５層に対応する。第３次調査では、この層は確認されていない。

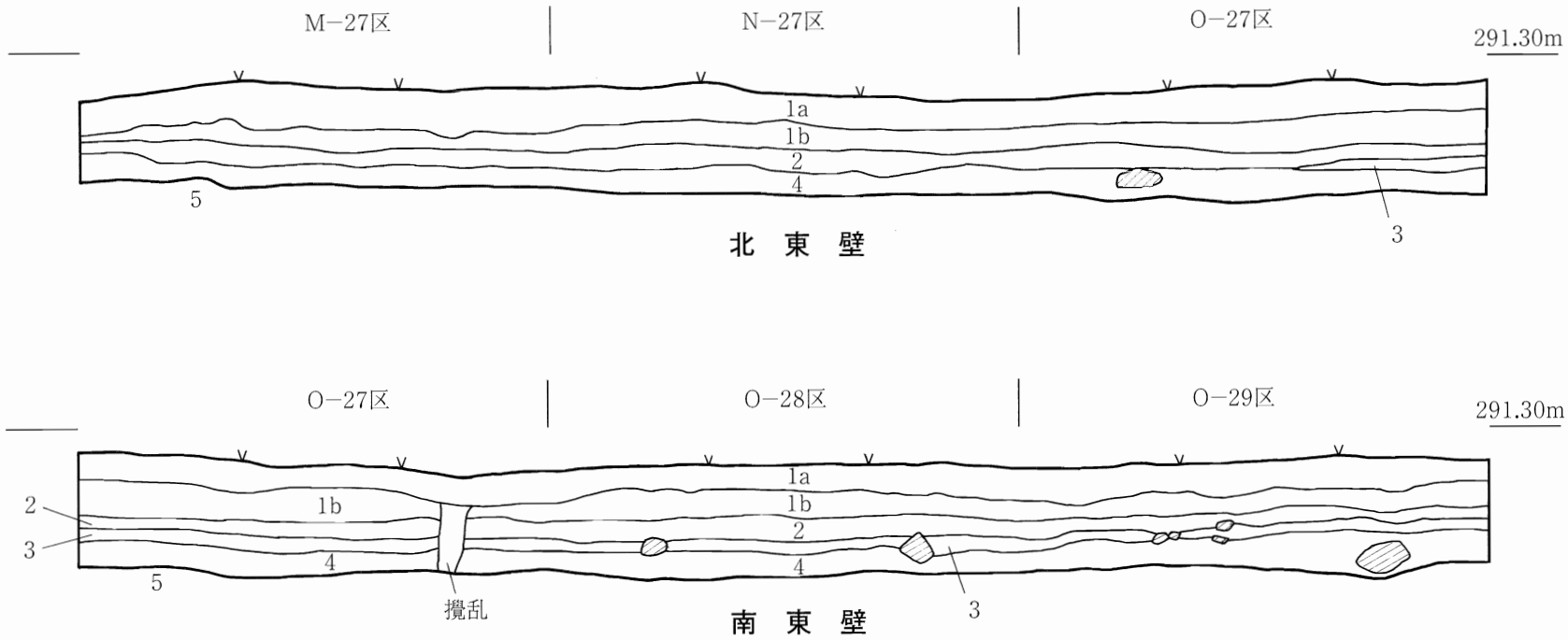
５層：４層の下で確認した、砂質を呈する層である。Hue10YR4/3にぶい黄褐色土層。粒子は極小で粘性をもち、しまりがある。第１次調査の４層、第２次調査の６Ｂ層、第３次調査の４層、第４次調査の７層に対応する。

これらの土層は、河川の氾濫や山地の崩壊土などによる攪乱の影響はみられず、比較的平坦な堆積が確認できる。しかし、検出された遺構などから、水田耕作によって４層の上面は削平されていることが確認された。第２次調査の４層にあてはまるものがみられないのもそのためであろう。第１次調査、第３次調査、第４次調査についても同じことがいえるので、削平の影響について考える必要があるだろう。また、調査区全体にわたって、３層で顕著にみられる酸化鉄の含浸が４層でもかなり深いところまでみられることは、植物の根の侵入に伴うものであると考えられ、攪乱の影響についても注意する必要があるだろう。

今回の調査では、遺物包含層である４層を堀り上げ、無遺物層である５層上面まで掘り下げを行なった。さらにサブトレンチを設定し、部分的に掘り下げて５層以下を確認している。

第４次調査の主な遺物包含層である６層は、今回それに対応する土層は確認されていない。これは第４次調査区が旧河道に近いという調査地点の違いによるものだという可能性が考えられる。

（油利　崇）



1 a 層．暗褐色土層(Hue10YR3/3・表土)
1 b 層．黒褐色土層(Hue10YR3/2・耕作土)
2 層．灰黄褐色土層(Hue10YR4/2・耕作土)
3 層．褐色土層(Hue7.5YR4/6・水田の床土)
4 層．黒褐色土層(Hue2.5Y3/2)
5 層．にぶい黄褐色土層(Hue10YR4/3)

0　1m

第 4 図　調査区北東壁および南東壁セクション図

3．遺構の検出状況および遺物の出土状況

今回の調査では、土坑１基、建物跡（住居址か？）の一部と思われる柱穴５基が検出された。ここでは検出された遺構と出土した遺物の状況について記述する。

遺構の検出状況は、土坑が調査区の北東側、柱穴が調査区の北側で検出された。遺構確認面は共に４層上面である。遺物は、縄文時代のものを中心に調査区全体で土器2,497点、土製品１点、石器416点が出土した。遺物の出土層位は、第１次調査埋土から土器１点、１層および２層から土器333点、石器128点、３層から土器89点、石器29点、４層上面から土器158点、石器13点、４層から土器1,867点、石器216点が出土している。また、壁清掃土から土器49点、石器17点が出ている。そのうちポイントを落として取り上げたものは土器694点、石器74点である。なお、今回の目的である縄文時代以外の遺物として、１層および２層から須恵器１点、陶磁器９点、寛永通宝２点がある。

４層を中心とする遺物の分布状況は、N－28、N～O－29区で集中してみられ、M－27、O－27区ではあまり見られなかった。遺物の接合例は16例あり、そのうちポイントを落とした例は12例であった。接合した土器同士の距離は、最も近いもので約３㎝、最も遠いもので約49㎝であった。また、M－27～29区においては遺物の出土量は少量であり、第１次調査で埋土に用いられた真土が検出された。したがって、当区の一部は第１次調査区にかかることが確かめられた。

土坑

SK－01（第５図、図版５）

SK－01は、N～O－27区で検出され、平面プランは不整楕円形を呈する。土坑の長軸方向はN36°Wである。規模は、確認面で長軸長が約110㎝、短軸長が約52㎝、底面では長軸長が約95㎝、短軸長が約39㎝、深さは最深部で確認面より約11㎝である。土坑壁の傾斜については比較的緩やかな角度で掘り込まれている。埋土は１層のみであり、色調はHue10YR2/3黒褐色を呈し、酸化鉄がブロック状に混入したシルト質の土である。

本土坑からは土器６点と骨粉１点が出土しており、そのうち出土位置を確認できたものは土器４点と骨粉１点である。図示したものは第10図－192、第11図－204、215の土器３点である。また、ウォーターフローテーションにかけるために、埋土はすべて持ち帰った。

建物跡

SB－01（第３図）

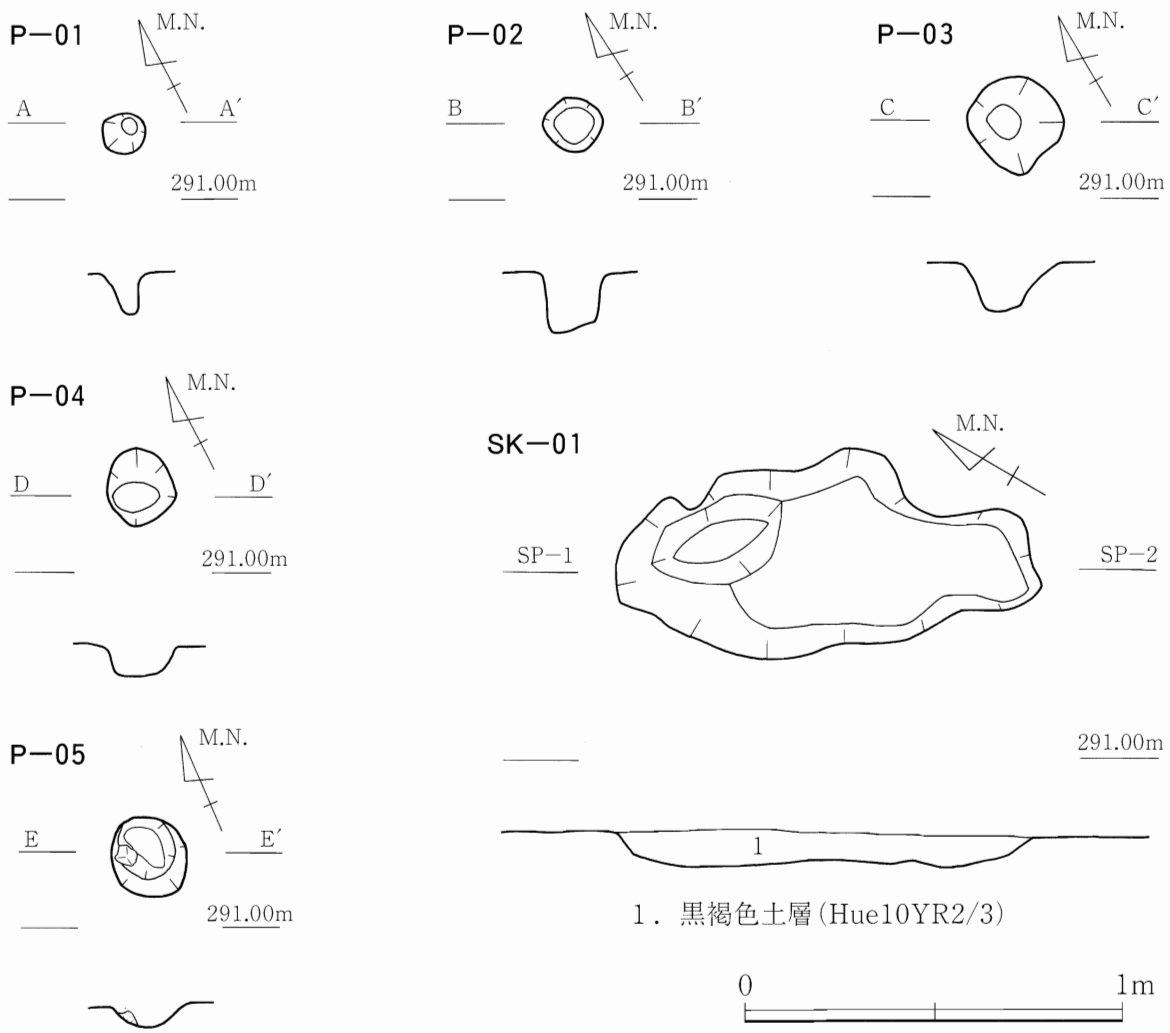
SB－01は、M～O－27～28区で検出された。各柱穴の中心間の直線距離は、P－01～02は約122㎝、P－02～03は約158㎝、P－03～04は約119㎝、P－04～05は約149㎝である。平均すると約137㎝になる。柱穴位置からこの建物跡を円形プランを持つものとして復元した場合、推定される規模は径約6.4mとなる。

P－01（第５図）

P－01は、M－27区で検出された。平面プランは円形を呈し、最大径は約12㎝である。深さは確認面より約12㎝である。

P－02（第５図）

P－02は、M－28区で検出された。平面プランは円形を呈し、最大径は約15㎝である。深さは確認



第５図　柱穴および土坑実測図

面より約16cmである。土器２点と石器１点が出土している。

P−03（第５図）

P−03は、N−28区で検出された。平面プランは不整円形を呈し、最大径は約26cmである。深さは確認面より約13cmである。

P−04（第５図）

P−04は、O−28区で検出された。平面プランは楕円形を呈し、最大径は約20cmである。深さは確認面より約８cmである。土器１点が出土しており、第10図−178に図示してある。

P−05（第５図）

P−05は、O−28区で検出された。平面プランは円形を呈し、最大径は約23cmである。深さは確認面より約６cmである。土器１点と石器１点が出土している。そのうち図示しているものは第10図−184の土器１点である。また、柱穴内に礫がみられた。

以上、遺構と遺物の検出、出土状況について述べてきた。今回検出された遺構は、全体的に掘り込みが浅くなっており、すべて同一平面上で検出された。このことは、後世の耕作によって遺構の上面が削られていることを示している。　（三谷　早希子）

第三章　出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器2,497点、土製品１点、石器416点、須恵器１点、陶磁器９点、寛永通宝２点である。須恵器、陶磁器、寛永通宝は１層および２層からの出土であり、今回の調査目的とも離れるので図示しないこととする。なお、この他に炭化物と骨粉が出土した。

遺物の取り上げ作業においては、４層以下の石器と２㎝以上の土器については全点ポイントをとり、それ以外の遺物は層位及びグリッド毎に一括して取り上げた。排土はすべて５㎜メッシュのふるいにかけ、小さな遺物のとりこぼしがないように努めた。

主要な遺物である縄文土器、土製品、石器について以下に記述していく。記述は、先に出土位置および層位について述べて、その後に土器については分類毎に、石器については製品を中心に器種毎に記述する。なお、縄文土器の時期的問題については第四章の考察において述べることとする。

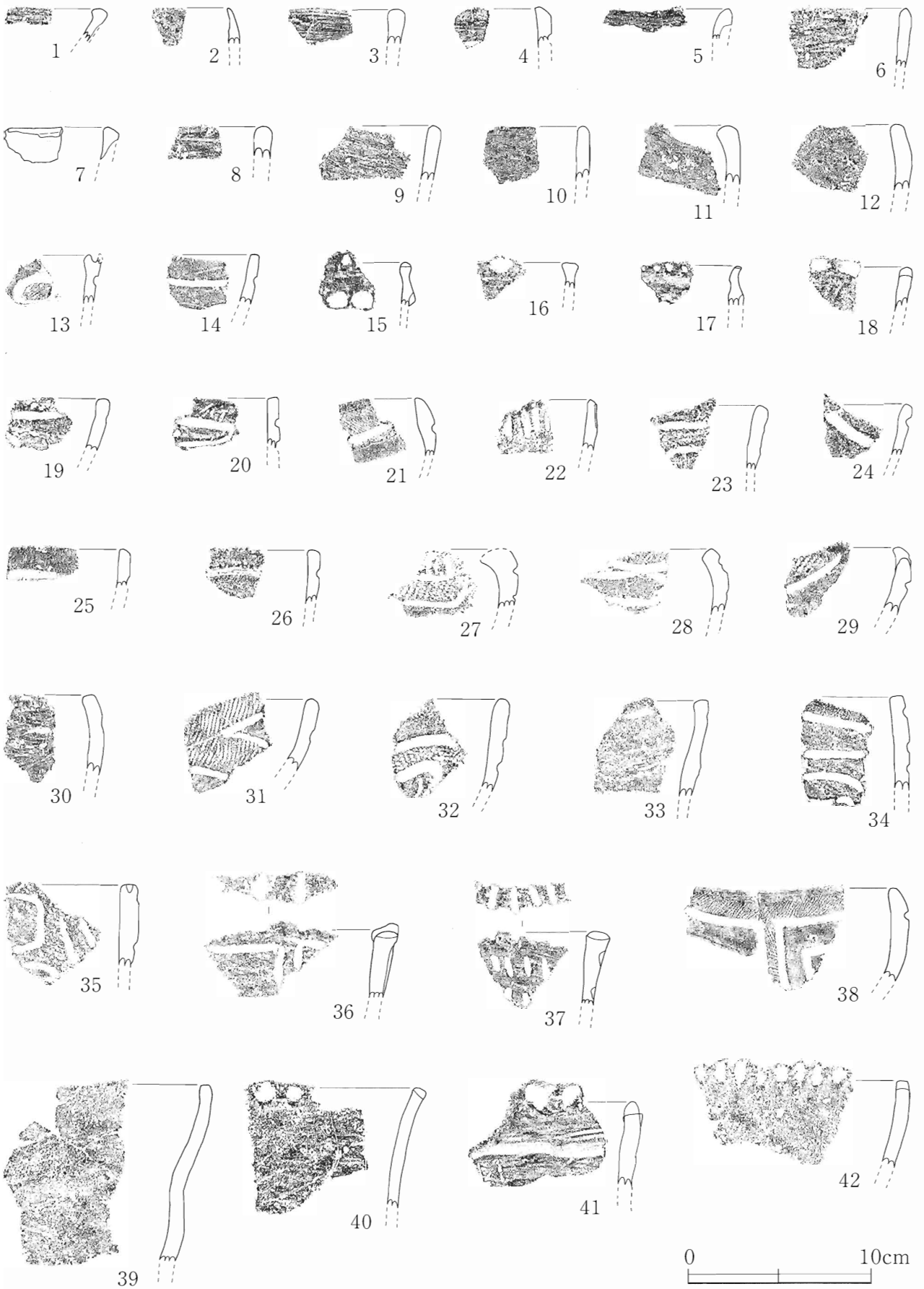
１．縄文土器（第６～11図、図版６～11）

土器の出土位置は次の通りである。１層および２層から出土した土器は、第７図－51、53、61、66、74、第８図－93、105、110、114、第９図－135、150、153、175である。３層から出土した土器は、第８図－97、第９図－134である。４層上面から出土した土器は、第６図－３、５、９、21、23、25、28、34、39、第７図－46、47、60、65、68、69、71、75、84、86、第８図－98、101、111、115、118、121、131、第９図－138、141～144、149、151、152、156、157、163、165～167、第10図－183、189～191、198、200、203、第11図－207、219、220、222～226である。４層中から出土した土器は、第６図－１、２、４、６～８、11～20、22、24、26、27、29～33、35～38、40、41、第７図－43～45、48～50、52、54～59、62～64、67、70、72、73、76～83、85、87、第８図－88～92、94～96、99、100、102～104、106～109、112、113、116、117、119、120、122～130、132、第９図－136、137、139、140、145～148、154、155、158～162、164、168～174、176、177、第10図－179～182、185～188、193～197、199、201、202、第11図－205、206、208～214、216～218、221、227～232である。壁清掃土からは第６図－10が出土している。これらの内、38、85、87、125、175、193、197、217、220は同一層位から出土したもの同士が接合したものである。

遺構から出土したものでは、SK－01から第10図－192、第11図－204、215が、P－04から第10図－178が、P－05から第10図－184がある。これらの他に、第６図－42は４層上面の土器と４層の土器が、第８図－133は４層上面の土器と１層および２層出土の土器が接合したものである。

分類の概要

出土した縄文土器2,497点のうち、比較的残りのよいもの231点に関して資料整理を行ない、分類した。まず、土器の部位によって、口縁部、胴部、底部に分けた。口縁部は口唇部文様からⅠ刻み目、Ⅱ圧痕、Ⅲ刺突、Ⅳ無文の４種類に分けた。次に、A地文に縄文を持つもの、B地文に縄文を持たないものに分け、さらに、a有文、b無文に分けた。胴部はA地文に縄文を持つもの、B地文に縄文を持たないものに分け、さらに、a有文、b無文に分けた。底部は資料数が少ないため、分類は行なわなかった。以上の分類に従い、各土器について記述を行なうことにする。



第６図　出土土器実測図（１）

口縁部（第６、７図、図版６、７）

Ⅰ－B－a 類（第６図－15、17、36、37）

第６図－15、17、36、37は口唇部に刻み目が施されている。15は外器面に圧痕が施されている。内器面はナデ調整され、胎土中に２㎜程度の石英を若干含む。色調は内外器面とも黒褐色を呈する。17は外器面に圧痕が施されている。内器面はナデ調整され、胎土中に２～４㎜の石英を若干含む。色調は内外器面とも黒色を呈する。36は棒状工具で沈線が施文されている。内外器面ともナデ調整され、胎土中に３㎜以下の長石、石英、黒雲母、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。37は棒状工具で刺突が施されている。内外器面ともナデ調整され、胎土中に３㎜以下の長石、石英を含む。色調は外器面が灰黄褐色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。15、36、37には褐鉄鉱が付着している。

Ⅰ－B－b 類（第６図－42）

第６図－42は口唇部に刻み目が施されている。内外器面ともナデ調整され、胎土中に１㎜以下の長石を含む。色調は外器面が灰褐色、内器面がにぶい褐色を呈する。褐鉄鉱が付着している。

Ⅱ－B－b 類（第６図－16、18、40、41）

第６図－16、18、40、41は口唇部に圧痕が施されている。16は内外器面ともナデ調整され、胎土中に１㎜以下の黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が暗褐色を呈する。18は外器面がナデ、内器面は条痕が残っており、胎土中に１㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が灰黄褐色を呈する。40は内外器面ともナデ調整され、胎土中に３㎜以下の長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が黄褐色を呈する。41は外器面がナデ、内器面は二枚貝によって条痕調整され、胎土中に１㎜以下の黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面が橙色を呈する。18、41には褐鉄鉱が付着している。

Ⅲ－B－a 類（第６図－13、35）

第６図－13、35は棒状工具で口唇部に刺突が施されている。13は擬似縄文と沈線が施文されている。内器面はナデ調整され、胎土中に１㎜程度の石英、１㎜以下の長石を含む。色調は内外器面とも黄灰色を呈する。35は波状口縁の波頂部である。波頂部に刺突が施され、棒状工具で沈線が施文されている。内外器面ともナデ調整され、胎土中に１～２㎜程度の長石、石英を含む。色調は外器面が灰褐色、内器面が暗褐色を呈する。褐鉄鉱が付着している。

Ⅳ－A－a類（第６図－21、29、31、32、38、第７図－43、47、49、51～53、55、57、62、64、66、79）

第６図－21、29、31、32、38、第７図－43、55、57、79は単節LR縄文が施され、棒状工具で沈線が施文されている。21は外器面がミガキ、内器面はナデ調整され、胎土中に１㎜以下の長石を若干含む。色調は外器面が褐灰色、内器面が灰褐色を呈する。29は波状口縁の波頂部付近である。内外器面ともナデ調整され、胎土中に１～５㎜程度の石英を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が黒褐色を呈する。31は波状口縁である。内器面はナデ調整され、胎土中に２～３㎜程度の石英を若干含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面がにぶい黄色を呈する。32は波状口縁である。内外器面ともナデ調整され、胎土中に２㎜以下の石英、１㎜以下の黒雲母、金雲母を含む。色調は内外器面ともにぶい黄褐色を呈する。38は内外器面ともミガキ調整され、胎土中に２㎜以下の長石、石英を含む。色調は外器面が黒色、内器面が黒褐色である。43は内器面がナデ調整され、胎土中に１㎜以下の長

石、石英、黒雲母を含む。色調は内外器面ともにぶい黄褐色を呈する。55は内器面がナデ調整され、胎土中に3㎜程度の長石、1㎜以下の長石、石英、金雲母を含む。色調は内外器面ともにぶい黄褐色を呈する。57は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜程度の長石を含む。色調は外器面がにぶい橙色、内器面が黄褐色を呈する。79は波状口縁の波頂部付近である。内外器面ともナデ調整され、胎土中に1～2㎜程度の長石、1～3㎜程度の石英を含む。色調は外器面が橙色、内器面がにぶい橙色を呈する。29、31、32、57、79には褐鉄鉱が付着している。

第7図－49は単節LR縄文が施され、棒状工具で沈線と刺突が施文されている。内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は内外器面とも灰黄褐色を呈する。

第7図－47、51、53、62、64、66は単節RL縄文が施され、棒状工具で沈線が施文されている。47は内器面がナデ調整され、胎土中に1㎜程度の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が灰黄褐色を呈する。51は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1～2㎜程度の石英を若干含む。色調は外器面が橙色、内器面が明黄褐色を呈する。全体的に磨滅している。53は内器面がナデ調整され、胎土中に1㎜以下の石英を若干含む。色調は内外器面ともにぶい黄橙色を呈する。外器面が磨滅している。62は内器面がナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面が橙色を呈する。64は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の黒雲母、1～2㎜程度の石英を含む。色調は外器面が橙色、内器面がにぶい橙色を呈する。外器面が磨滅している。66は内器面がナデ調整され、胎土中に1㎜以下の金雲母を若干含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。外器面に褐鉄鉱が付着している。

第7図－52は縄文が施され、棒状工具で沈線が施文されている。内器面はナデ調整され、胎土中に1㎜程度の長石、1㎜以下の黒雲母を若干含む。色調は内外器面ともにぶい黄橙色を呈する。全体的に磨滅しており、縄文の節は不明である。

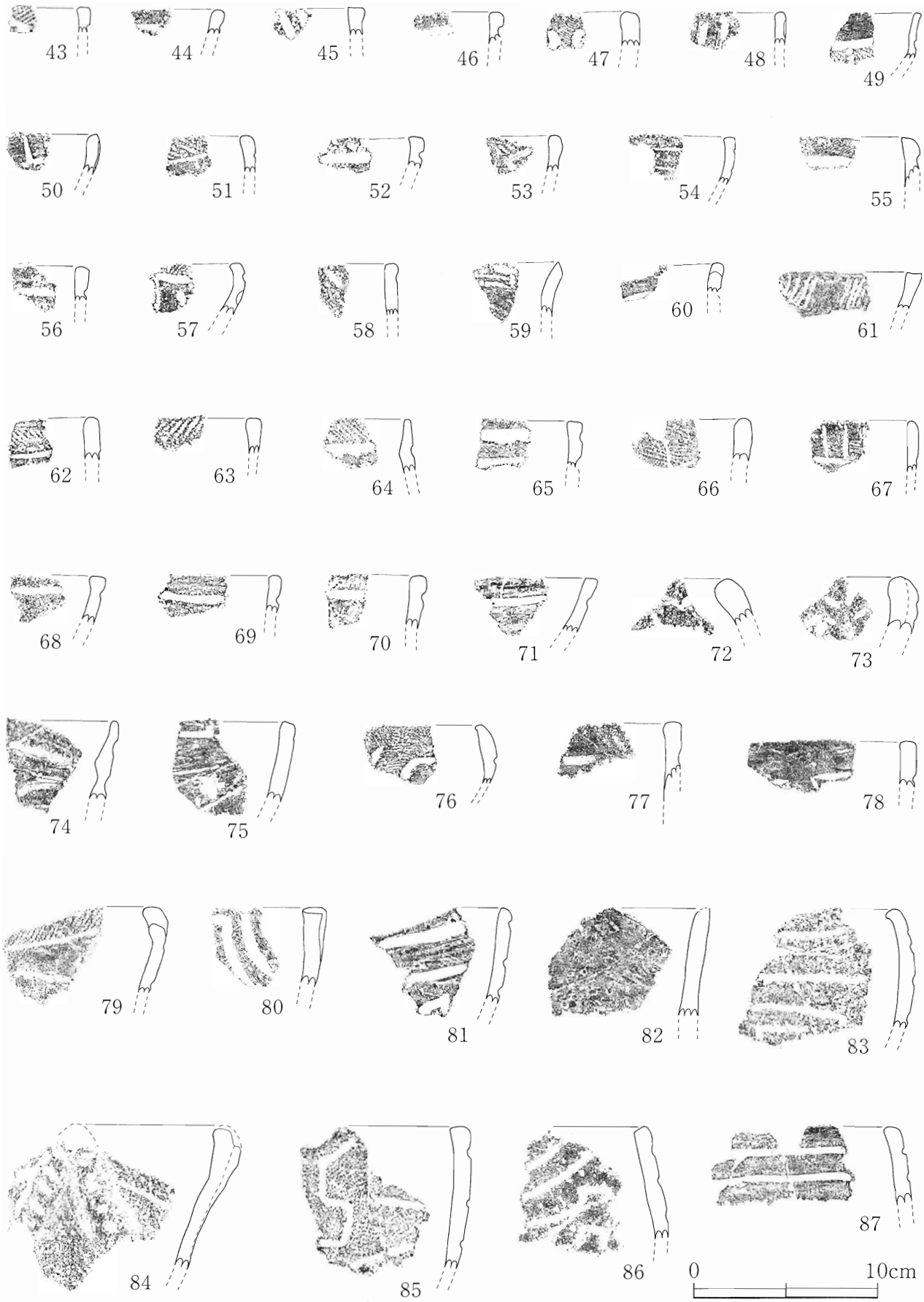
Ⅳ－A－b類（第7図－63）

第7図－63は単節LR縄文が施されている。内器面はナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石を若干含む。色調は外器面が灰黄褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。

Ⅳ－B－a類（第6図－4、14、19、20、22～26、28、33、34、第7図－44～46、48、50、54、56、58～61、65、67～78、80、81、83～87）

第6図－4、14、19、20、22～26、28、33、34、第7図－44～46、48、50、54、56、58、60、61、65、67～71、74～78、80、81、83～87は棒状工具で沈線が施されている。4は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が暗灰黄色を呈する。14は波状口縁である。内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の黒雲母、金雲母を若干含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。19は内外器面ともナデ調整され、胎土中に2㎜程度の長石、1㎜以下の金雲母を含む。色調は外器面が灰黄色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。20は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1～2㎜程度の石英、1㎜以下の黒雲母を含む。色調は内外器面ともにぶい黄褐色を呈する。22は波状口縁である。内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は外器面が褐色、内器面が明赤褐色を呈する。23は波状口縁である。内外器面ともナデ調整され、胎土中に4㎜程度の石英、2㎜以下の長石、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。24は波状口縁の波頂部付近である。内外

器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜程度の長石、1㎜以下の黒雲母を微量に含む。色調は内外器面ともにぶい黄橙色を呈する。25は内外器面ともナデ調整され、胎土中に4㎜程度の長石、1㎜程度の石英、黒雲母、金雲母を含む。色調は内外器面ともにぶい黄橙色を呈する。26は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石、石英、黒雲母、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面がにぶい褐色を呈する。28は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1～3㎜の長石、石英を含む。色調は外器面が黄褐色、内器面が灰黄褐色を呈する。33は波状口縁である。内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石、黒雲母を多く含む。色調は内外器面ともにぶい黄橙色を呈する。全体的に磨滅している。34は波状口縁である。内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石を多量に含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面がにぶい橙色を呈する。内器面が磨滅している。44は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石、黒雲母、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい薄橙色、内器面が灰黄褐色を呈する。45は内器面がナデ調整され、胎土中に1～2㎜程度の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面がにぶい橙色を呈する。46は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。48は内外器面ともナデ調整され、胎土中に3㎜程度の長石、1㎜以下の長石、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。50は内外器面ともナデ調整され、胎土中に3㎜以下の長石と、1㎜以下の黒雲母を含む。色調は外器面が灰黄色、内器面が灰黄褐色を呈する。54は内外器面ともナデ調整され、胎土中に2㎜程度の石英を微量に含み、1㎜程度の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。56は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1～2㎜程度の石英、1㎜程度の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が黄褐色を呈する。58は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の石英を含む。色調は内外器面ともにぶい黄橙色を呈する。60は口縁部突起部分である。内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の黒雲母を若干含む。色調は内外器面ともにぶい黄褐色を呈する。61は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の滑石を含む。色調は外器面が灰褐色、内器面がにぶい褐色を呈する。65は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1～2㎜程度の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。67は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石を若干含む。色調は外器面がにぶい橙色、内器面が明褐色を呈する。68は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1～3㎜程度の長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が灰黄褐色を呈する。69は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の黒雲母、金雲母を含む。色調は外器面が褐色、内器面がにぶい褐色を呈する。70は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜程度の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面がにぶい橙色を呈する。71は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1～3㎜程度の長石を含む。色調は内外器面ともにぶい黄橙色を呈する。74は波状口縁である。内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜程度の長石と、石英を若干含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。75は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜程度の長石、金雲母を含む。色調は内外器面とも灰黄褐色を呈する。76は擬似縄文が施されている。内器面はナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石を若干含む。色調は色内外器面とも褐灰色を呈する。77は内外器面ともナデ調整され、胎土中に2㎜以下の長石、石英を含む。色調は内外器面ともにぶい黄橙色を呈する。78は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石、石英、



第７図　出土土器実測図（２）

金雲母を含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面が灰黄色を呈する。80は波状口縁の波頂部付近である。内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は外器面が明褐色、内器面が褐色を呈する。81は波状口縁である。内外器面ともナデ調整され、1～2㎜程度の長石、1～3㎜程度の石英を含む。色調は外器面が灰黄褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。83は内湾する波状口縁である。内外器面ともナデ調整され、胎土中に2㎜以下の長石、石英を多量に含む。色調は外器面が橙色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。84は波状口縁の波頂部であり、隆帯に刻み目が施されている。内器面はナデ調整され、胎土中に1㎜以下の金雲母を多量に含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面がにぶい褐色を呈する。85は内外器面がナデ調整され、胎土中に2㎜以下の長石を多量に含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が褐灰色を呈する。86は内湾する波状口縁である。内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が黒褐色を呈する。87は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。4、20、28、56、61、65、75、76、78、80、81、86には褐鉄鉱が付着する。

第7図－59は横位に刻み目が施されている。内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の滑石を含む。色調は外器面が黒褐色、内器面が褐灰色を呈する。

第7図－72、73は波状口縁の波頂部である。72は刻み目が施されている。内外器面ともナデ調整され、胎土中に1～2㎜程度の長石、石英、1㎜以下の金雲母を含む。色調は内外器面ともにぶい黄橙色を呈する。73は隆帯に刻み目が施されている。内器面はナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は外器面が明赤褐色、内器面が灰黄褐色を呈する。

Ⅳ－B－b類（第6図－1～3、5～12、30、39、第7図－82）

第6図－1は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の金雲母を若干含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。2は内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が暗黄灰色を呈する。3は内外器面ともミガキ調整され、胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は内外器面とも灰褐色を呈する。5は接合面で剥落している。内外器面ともミガキ調整され、胎土中に1㎜以下の長石、石英、黒雲母を含む。色調は内外器面ともにぶい黄褐色を呈する。6は内外器面ともナデ調整され、胎土中に3㎜以下の石英、1㎜以下の長石、黒雲母、金雲母を含む。色調は外器面が橙色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。7は外器面がほとんど剥落している。内外器面ともナデ調整され、胎土中に1㎜以下の長石を若干含む。色調は内外器面ともにぶい黄橙色を呈する。8は内外器面ともナデ調整され、胎土中に2～5㎜程度の石英を若干含む。色調は外器面がにぶい橙色、内器面が灰褐色を呈する。9は波状口縁である。外器面がナデ、内器面が条痕で調整され、胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は外器面が褐灰色、内器面がにぶい褐色を呈する。10は外器面がハケメ、内器面がナデ調整され、胎土中に1㎜以下の石英、黒雲母を含む。色調は外器面が灰白色、内器面が黄灰色を呈する。11は波状口縁の波頂部である。内外器面ともナデ調整され、胎土中に3㎜以下の石英、1㎜以下の長石、黒雲母を含む。色調は内外器面とも暗灰黄色を呈する。12は外器面がミガキ、内器面がナデ調整され、胎土中に1㎜以下の金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄色、内器面が暗灰黄色を呈する。30は内外器面ともミガキ調整され、胎土中に3㎜以下の長石、1㎜以下の石英、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶ

い褐色、内器面が灰黄褐色を呈する。39は内外器面ともナデ調整され、胎土中に3㎜以下の長石、2㎜以下の石英、1㎜以下の黒雲母、金雲母を含む。色調は内外器面とも黄褐色を呈する。第7図－82は波状口縁の波頂部である。外器面はミガキ、内器面はナデ調整され、胎土中に2㎜以下の長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄色、内器面が暗灰黄色を呈する。46、54、55、57、84には褐鉄鉱が付着している。

その他に、第6図－27は口唇部が剥落しているため、分類が不可能である。単節LR縄文が施され、棒状工具で沈線が施文されている。内器面はナデ調整され、胎土中に1～3㎜の長石、石英を多く含む。色調は、外器面が灰黄橙色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。（佐海　由美子）

胴部（第8～11図－220、図版8～11）

A－a類（第8図－91、95、105、106、110、116、118、120～122、125、126、第9図－136、140、141、146、150、152、154、163～166、168、169、172、177）

第8図－95、106、125、126、第9図－140、141、146、152は単節RL縄文が施され、棒状工具で沈線が施文されている。95は内器面が条痕で調整されている。胎土中に1㎜以下の石英、長石を若干含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が黒褐色を呈する。106は内器面がナデで調整されている。胎土中に1～3㎜の石英、1㎜程度の長石、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が灰黄褐色を呈する。125は内器面がナデで調整されている。胎土中に1～3㎜の石英、1㎜程度の長石、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が灰黄褐色を呈する。126は内器面がナデで調整されている。胎土中に4㎜の石英を若干、1㎜以下の石英、金雲母を含む。色調は外器面が橙色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。140は内器面がナデで調整されている。胎土中に2㎜以下の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい橙色、内器面が灰褐色を呈する。141は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が灰黄褐色を呈する。146は内器面がナデで調整されている。胎土中に2㎜程度の石英、1㎜以下の長石、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。152は内器面がナデで調整されている。胎土中に2㎜程度の石英、1㎜以下の長石、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。106、125、141、146、152には褐鉄鉱が付着している。

第8図－110、116、118、121、122、第9図－150、154、163～166、168、169、172、177は単節LR縄文が施され、棒状工具によって沈線が施されている。110は内器面がミガキで調整されている。胎土中に1㎜程度の長石、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい橙色、内器面が灰黄褐色を呈する。116は内器面が粗いナデで調整されている。胎土中に1～2㎜の長石、1㎜以下の黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面がにぶい褐色を呈する。118は内器面が条痕とナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石、石英を若干含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面が黒褐色を呈する。121は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜程度の長石、石英を含む。色調は外器面が灰褐色、内器面が黒褐色を呈する。122は内器面がナデで調整されている。胎土中に1～4㎜の金雲母、1～2㎜程度の長石を含む。色調は外器面が暗褐色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。150は内器面がナデで調整されている。胎土中に2㎜程度の長石、石英、1㎜以下の金雲母を含む。色調は内外器面ともににぶい黄褐色を呈する。154は内器面がナデで調整されている。胎土中に2㎜程度の石英を若干、1㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面がにぶい橙色を呈する。

163は内器面がミガキで調整されている。胎土中に１㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が褐色を呈する。164は内器面がナデで調整されている。胎土中に１～２㎜程度の長石を含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面が黒褐色を呈する。165は内器面がミガキで調整されている。胎土中に１㎜以下の長石、石英を含む。色調は外器面が暗灰黄色、内器面が黒色を呈する。166は内器面がナデで調整されている。胎土中に２㎜以下の長石、石英、黒雲母を含む。色調は内外器面ともに黄褐色を呈する。168は内器面がナデで調整されている。胎土中に１～２㎜の長石、石英、１㎜以下の金雲母を含む。色調は外器面が灰黄褐色、内器面が褐色を呈する。169は内器面が条痕で調整されている。胎土中に２㎜以下の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面が褐灰色を呈する。172は内器面が条痕で調整されている。胎土中に１㎜程度の長石、石英を若干含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が褐灰色を呈する。177は内器面がナデで調整されている。胎土中に１～２㎜程度の長石、石英を含む。色調は外器面が暗褐色、内器面が褐色を呈する。110、118、150、154、163、165、166、168、177には褐鉄鉱が付着している。

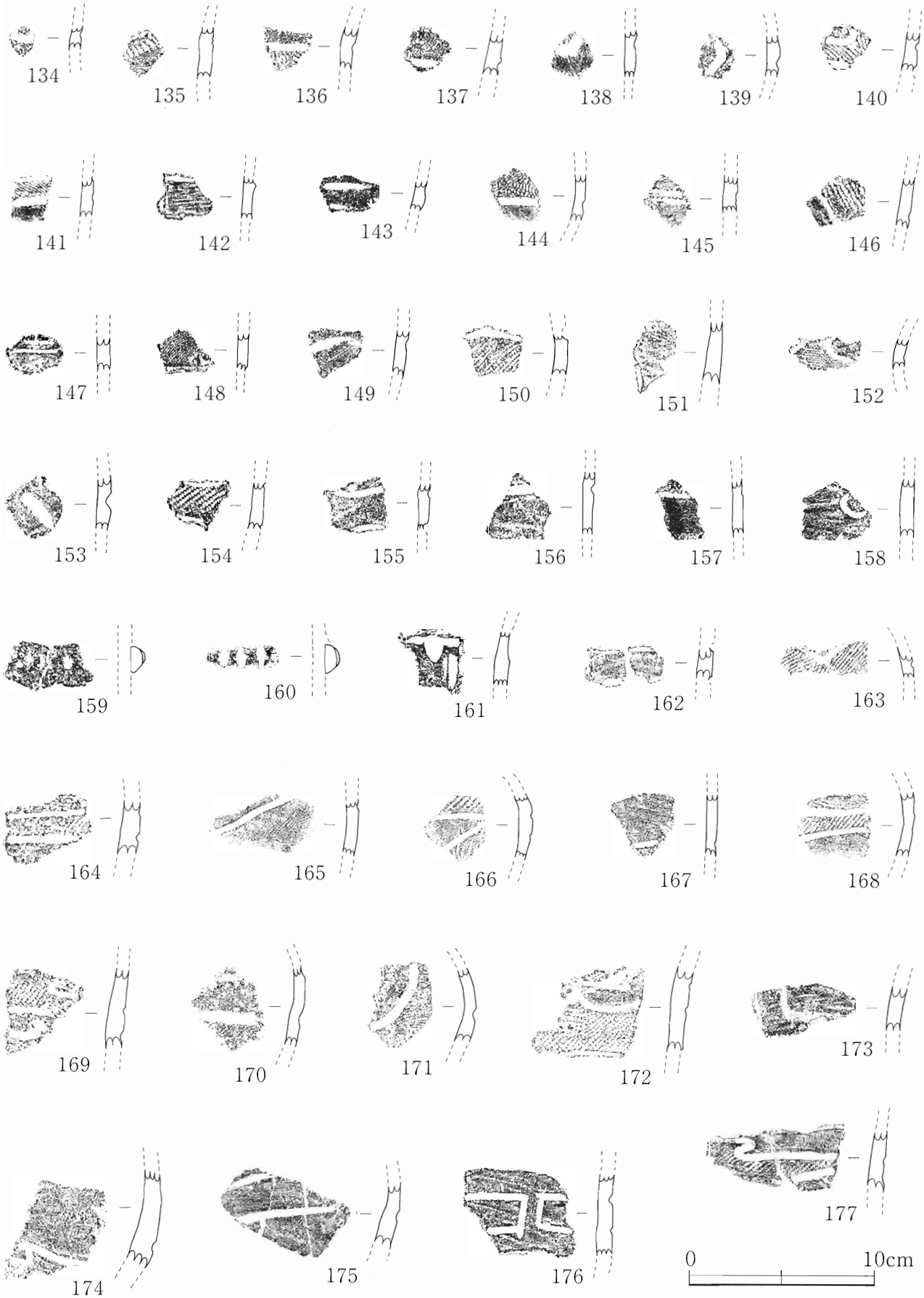
第８図－91、105、120、第９図－136は磨滅のため節等は不明であるが、地文に縄文をもち、棒状工具で沈線が施されている。91は内器面がナデで調整されている。胎土中に２㎜程度の石英を若干、１㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面がにぶい橙色を呈する。外器面に褐鉄鉱が付着している。105は内器面がナデで調整されている。胎土中に１㎜程度の長石を含む。色調は内外器面ともにぶい黄橙色を呈する。120は内器面がナデで調整されている。胎土中に１㎜程度の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が灰黄褐色を呈する。136は内器面がナデで調整されている。胎土中に１㎜程度の石英、１㎜以下の長石、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい橙色、内器面が褐灰色を呈する。

B－a 類（第８図－88～90、92～94、96～104、107～109、111～115、117、119、123、124、127～133、第９図－134、135、137～139、142～145、147～149、151、153、155～162、167、170、171、173～176、第10図－179、181）

第８図－88～90、92～94、96～104、107～109、111～115、119、123、124、127～132、第９図－137、139、142、143、147、149、151、153、155～158、162、167、170、171、173～176、第10図－179、181は棒状工具による沈線が施されている。88は内器面がナデで調整されている。胎土中に１㎜程度の滑石、１㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい赤褐色、内器面が暗褐色を呈する。89は内器面がナデで調整されている。胎土中に１㎜以下の長石、石英、金雲母、黒雲母を含む。色調は外器面、内器面ともに灰黄褐色を呈する。90は内器面が条痕で調整されている。胎土中に１㎜以下の長石を若干含む。色調は外器面がにぶい黄色、外器面が黄褐色を呈する。92は内器面がナデで調整されている。胎土中に２㎜程度の石英、１㎜以下の長石、金雲母を含む。色調は外器面が黄褐色、内器面がにぶい黄色を呈する。93は内器面がナデで調整されている。胎土中に１㎜以下の滑石、長石、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい赤褐色、内器面がにぶい褐色を呈する。94は内器面の調整は磨滅しているため、不明である。胎土中に１㎜以下の石英、長石を含む。色調は内外器面ともに橙色を呈する。内外器面ともにかなり磨滅している。96は内器面がナデで調整されている。胎土中に２㎜程度の石英を若干、１㎜程度の長石を含む。色調は内外器面ともににぶい黄褐色を呈する。97は内器面がナデで調整されている。胎土中に２㎜程度の石英、１㎜以下の長石を若干含む。色調は外器面がにぶい

第8図　出土土器実測図（3）

黄褐色、内器面が灰黄褐色を呈する。98は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石、石英、金雲母を含み、3㎜程度の長石、石英を若干含む。色調は内外器面ともににぶい黄橙色を呈する。99は内器面がナデで調整されている。胎土中に2㎜程度の石英を若干、1㎜以下の長石、金雲母を含む。色調は外器面が灰黄褐色、内器面が褐灰色を呈する。100は内器面がミガキで調整されている。胎土中に2㎜以下の長石、石英、金雲母、黒雲母を含む。色調は外器面が黄褐色、内器面が暗灰黄色を呈する。101は内器面がナデで調整されている。胎土中に1～3㎜程度の長石を含む。色調は外器面が橙色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。102は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。103は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石を若干含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が灰黄褐色を呈する。104は内器面がナデで調整されている。胎土中に2㎜程度の滑石、1㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面が黒褐色を呈する。107は内器面がナデで調整されている。胎土中に2㎜以下の滑石、金雲母を含む。色調は外器面が灰赤色、内器面が灰褐色を呈する。108は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜程度の長石を含む。色調は内外器面ともににぶい黄橙色を呈する。109は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石、石英を含む。色調は外器面が灰黄褐色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。111は内器面がナデで調整されている。胎土中に3㎜以下の長石を含む。色調は外器面が灰黄褐色、内器面が褐色を呈する。112は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石、金雲母を含む。色調は外器面が灰褐色、内器面が橙色を呈する。113は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の石英を含む。色調は外器面が灰褐色、内器面がにぶい褐色を呈する。114は内器面がナデで調整されている。胎土中に2㎜程度の石英、1㎜以下の金雲母を含む。色調は内外器面ともににぶい黄褐色を呈する。115は内器面が粗いナデで調整されている。胎土中に1～2㎜程度の長石、1㎜以下の黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面がにぶい褐色を呈する。119は内器面が条痕後ナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。123は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜程度の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。124は内器面がナデで調整されている。胎土中に1～2㎜の長石を含む。色調は外器面が灰黄褐色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。127は内器面がナデで調整されている。胎土中に2㎜以下の滑石を含む。色調は外器面が暗赤褐色、内器面が黒褐色を呈する。128は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい赤褐色、内器面が灰褐色を呈する。129は内器面が条痕で調整されている。胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が褐灰色を呈する。130は内器面が条痕で調整されている。胎土中に2㎜以下の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい橙色、内器面が褐灰色を呈する。131は内器面がナデで調整されている。胎土中に5㎜程度の石英、1㎜以下の長石、金雲母を若干含む。色調は内外器面ともに灰黄褐色を呈する。132は内器面がナデで調整されている。胎土中に1～2㎜の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい橙色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。137は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面が灰褐色を呈する。139は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜程度の長石、金雲母を含む。色調は外器面が灰黄褐色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。142は内器面が

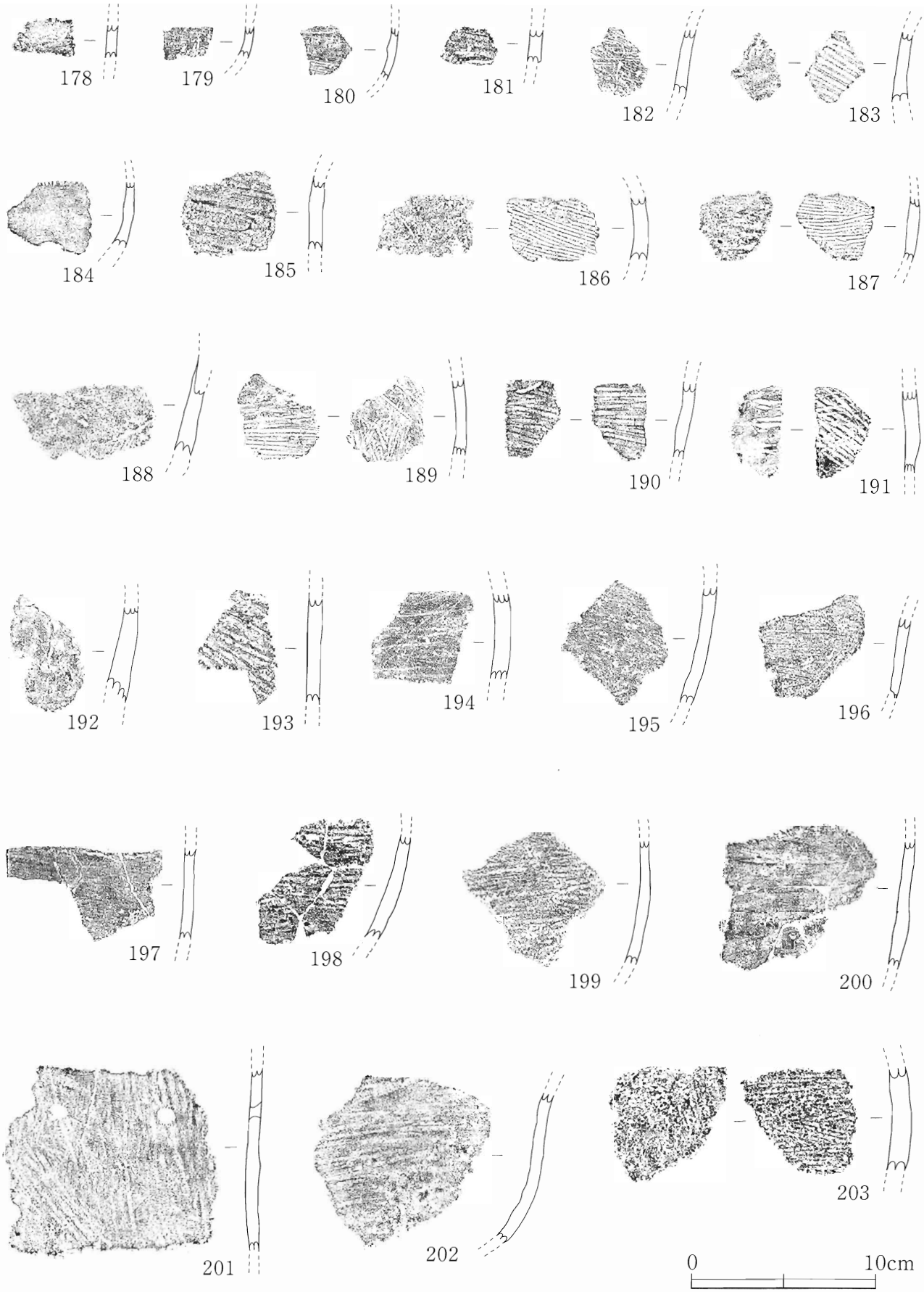


第９図　出土土器実測図（４）

ナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は外器面が褐灰色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。143は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石を若干含む。色調は外器面がにぶい赤褐色、内器面が灰赤色を呈する。全体的に磨滅している。147は内器面が条痕で調整されている。胎土中に1㎜以下の長石を若干含む。色調は外器面が橙色、内器面がにぶい橙色を呈する。149は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が褐色を呈する。151は内器面がナデで調整されている。胎土中に2㎜以下の長石を含む。色調は外器面が灰黄褐色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。153は内器面がナデで調整されている。胎土中に1～2㎜程度の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が暗灰黄色を呈する。155は内器面の調整は磨滅していて不明である。胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい橙色、内器面が褐灰色を呈する。156は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面がにぶい赤褐色を呈する。157は内器面が条痕の後ナデで調整されている。胎土中に1㎜程度の金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。158は内器面がナデで調整されている。胎土中に1～2㎜程度の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が灰黄褐色を呈する。162は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石、金雲母を含む。色調は外器面が灰褐色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。167は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石を微量に含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が褐灰色を呈する。170は内器面がナデで調整されている。胎土中に2～3㎜程度の石英、1㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が黄褐色を呈する。171は内器面が丁寧なナデで調整されている。胎土中に1～2㎜程度の長石、石英、1㎜以下の金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が灰黄褐色を呈する。173は内器面が条痕で調整されている。胎土中に1㎜以下の黒雲母を含む。色調は外器面が赤褐色、内器面が橙色を呈する。174は内器面が条痕で調整されている。胎土中に1㎜以下の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が黒褐色を呈する。175は内器面がナデで調整されている。胎土中に1～2㎜程度の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面がにぶい褐色を呈する。176は内器面がナデで調整されている。胎土中に3㎜以下の長石、石英、金雲母を含む。色調は外器面が灰黄褐色、内器面が暗褐色を呈する。179は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石、石英を若干含む。色調は外器面が灰黄褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。181は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石、石英を含む。色調は外器面が灰褐色、内器面が橙色を呈する。89、90、92、94、96～103、107～109、111～114、119、123、124、127、128、131、132、139、142、143、147、149、151、153、156～158、162、167、171、173、175、176には褐鉄鉱が付着している。

第8図－133は突帯の上とその直上に2列単位の刺突が施されている。内器面はナデで調整されている。胎土中に3㎜以下の滑石、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が灰黄褐色を呈する。褐鉄鉱が付着している。

第9図－134、135は棒状工具による刻み目が施されている。134は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の滑石を多量に含む。色調は内外器面ともににぶい橙色を呈する。135は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の滑石を多量に含む。色調は外器面がにぶい橙色、内器面が灰黄褐色を呈する。



第10図　出土土器実測図（5）

第９図－138は沈線が施され、内器面がナデで調整されている。胎土中に１～２㎜の長石、石英、１㎜以下の黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が黄灰色を呈する。全体的に磨滅しており、褐鉄鉱が付着している。

第８図－117、第９図－144、148は擬似縄文が施文され、棒状工具による沈線が施されている。117は内器面がナデで調整されている。胎土中に１㎜以下の金雲母を微量に、２㎜程度の石英、１㎜程度の長石を若干含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。144は内器面がナデで調整されている。胎土中に１～３㎜の石英を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。内外器面に褐鉄鉱が付着している。148は内器面がナデで調整されている。胎土中に２㎜の長石を若干含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面がにぶい橙色を呈する。外器面に褐鉄鉱が付着している。

第９図－145は２列単位の刺突が施され、内器面がナデで調整されている。胎土中に１㎜以下の滑石、長石を含む。色調は内外器面ともににぶい赤褐色を呈する。褐鉄鉱が付着している。

第９図－159、160は貼付突帯のはがれ落ちたもので、棒状工具による刻み目をもつ。159は胎土中に１～２㎜程度の長石、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色を呈する。外器面に褐鉄鉱が付着している。160は胎土中に１～３㎜程度の長石、１㎜以下の金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色を呈する。外器面に褐鉄鉱が付着している。

第９図－161は棒状工具による沈線と凹点が施され、内器面はナデで調整されている。胎土中に２㎜以下の滑石、長石を含む。色調は外器面が赤色、内器面が暗褐色を呈する。褐鉄鉱が付着している。

（池田　恵理）

B－b 類（第10図－178、180、182～203、第11図－204～220）

第10図－178、180、185、188、192、194、195、第11図－217は内外器面ともにナデで調整されている。178は胎土中に１㎜以下の長石、黒雲母、金雲母、１㎜程度の石英を若干含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。180は胎土中に１㎜程度の長石、１～３㎜程度の石英を含む。色調は外器面が褐灰色、内器面が黒褐色を呈する。185は胎土中に１～２㎜程度の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面がにぶい褐色を呈する。188は胎土中に１～２㎜程度の長石、石英、１㎜以下の金雲母を含む。色調は外器面が橙色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。192は胎土中に１～３㎜程度の滑石を含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面がにぶい橙色を呈する。194は胎土中に２㎜以下の滑石、１㎜以下の黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい赤褐色、内器面が灰黄褐色を呈する。195は胎土中に１～４㎜程度の長石、石英、１～２㎜程度の金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が黄褐色を呈する。217は胎土中に１～２㎜程度の石英、１㎜以下の黒雲母、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が黒褐色を呈する。焼成後穿孔されている。また180、185、188、192、195、217は褐鉄鉱が付着している。

第10図－182、196、198～200、202、第11図－204、213、218、220は外器面が条痕、内器面がナデで調整されている。182は胎土中に１～２㎜程度の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい赤褐色、内器面がにぶい褐色を呈する。196は胎土中に１㎜以下の長石、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が明褐色を呈する。198は胎土中に１㎜以下の石英、長石を含む。１㎜以下の金雲母を多く含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が灰黄褐色を呈する。199は胎土中に１～２㎜

程度の長石、石英、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。200は胎土中に1㎜以下の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面が明赤褐色を呈する。202は胎土中に1～4㎜程度の長石、1～2㎜程度の石英、黒雲母、金雲母を含む。色調は外器面が灰黄褐色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。204は胎土中に1㎜以下の黒雲母を含む。色調は内外器面ともににぶい橙色を呈する。213は胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面がにぶい黄色を呈する。218は胎土中に1～2㎜程度の石英、1㎜以下の長石、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面が褐灰色を呈する。220は胎土中に1㎜以下の黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄色、内器面が灰黄色を呈する。196、198～200、202、204、213、218、220は褐鉄鉱が付着している。

第10図－183、186、187、203、第11図－210、219は外器面がナデ、内器面が条痕で調整されている。183は胎土中に1㎜以下の黒雲母を含む。色調は内外器面ともににぶい黄褐色を呈する。外器面が磨滅している。186は胎土中に1～2㎜程度の長石、石英を含む。色調は外器面が橙色、内器面が黒褐色を呈する。187は胎土中に1～4㎜程度の長石を含む。色調は外器面がにぶい橙色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。203は胎土中に1～3㎜程度の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が浅黄色を呈する。210は胎土中に1㎜以下の長石、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。219は胎土中に1㎜以下の長石を若干含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が灰黄褐色を呈する。183、203、210は褐鉄鉱が付着している。

第10図－184、201、第11図－206は外器面がミガキ、内器面がナデで調整されている。184は胎土中に1～3㎜程度の長石、1㎜程度の石英、1㎜以下の黒雲母を若干含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が暗灰黄色を呈する。201は胎土中に1～2㎜程度の長石を多量に含む。色調は外器面が灰黄褐色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。補修孔が3ヶ所あいている。206は胎土中に1～2㎜程度の長石、石英を含む。色調は外器面が黒褐色、内器面が黄灰色を呈し、褐鉄鉱が付着している。

第10図－189～191、第11図－207、208、211、212、214～216は内外器面ともに条痕で調整されている。189は胎土中に1㎜以下の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が灰黄褐色を呈する。190は胎土中に1㎜以下の黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい橙色、内器面がにぶい赤褐色を呈する。191は胎土中に1㎜以下の長石、石英、金雲母を含む。色調は外器面が灰黄褐色、内器面が褐灰色を呈する。207は胎土中に1～2㎜程度の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が褐色を呈する。208は胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が褐色を呈する。211は胎土中に1㎜以下の長石を若干含む。色調は外器面が褐灰色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。212は胎土中に1㎜以下の長石を若干含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。214は胎土中に1㎜以下の長石、2㎜以下の黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい橙色、内器面が暗灰黄色を呈する。215は胎土中に1㎜程度の長石を若干含む。色調は外器面が褐灰色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。外器面が磨滅している。216は胎土中に1㎜以下の長石を含む。色調は外器面が黄褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。189、191、207、208、212、214、215は褐鉄鉱が付着している。

第10図－193は外器面が条痕、内器面がミガキで調整されている。胎土中に1～2㎜程度の石英、1㎜以下の長石、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が灰黄褐色を呈する。褐鉄鉱

が付着している。

第10図－197は外器面がナデ、内器面がミガキで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が灰黄褐色を呈する。褐鉄鉱が付着している。

第11図－205、209は内外器面ともにナデで調整されている。205は土師質で、胎土中に1㎜以下の長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面が黄褐色、内器面が灰黄褐色を呈する。褐鉄鉱が付着している。209は壷形土器の頸部で、胎土中に3㎜以下の長石、2㎜以下の石英を含む。色調は内外器面ともににぶい黄橙色を呈する。205、209は縄文時代より下る可能性がある。

底部（第11図－221～231、図版11）

第11図－221は外器面に指頭圧痕がみられ、内器面はミガキで調整されている。胎土中に1㎜以下の金雲母を含む。色調は外器面が黄灰色、内器面が灰黄褐色を呈する。褐鉄鉱が付着している。

第11図－222は外器面がミガキ、内器面がナデで調整されている。胎土中に6㎜の石英を若干、1㎜以下の金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が黄灰色を呈する。接合面で外れている。上部の割れ口部分に補修孔があけられている。褐鉄鉱が付着している。

第11図－223、226～229、231は内外器面ともにナデで調整されている。223は胎土中に1㎜以下の長石、金雲母を多量に含む。色調は外器面が灰黄褐色、内器面が灰褐色を呈する。接合面で外れている。226は胎土中に2㎜以下の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が灰黄褐色を呈する。接合面で外れている。227は胎土中に1㎜程度の長石、石英を含む。色調は内外器面ともににぶい橙色を呈する。上げ底である。228は胎土中に1㎜程度の石英、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい橙色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。229の復元径は、約12.0㎝である。胎土中に2㎜以下の長石、石英、金雲母を若干含む。色調は外器面が淡黄色、内器面が暗灰黄色を呈する。231は胎土中に2㎜以下の長石、石英、1㎜以下の金雲母を含む。色調は外器面が明赤褐色、内器面がにぶい褐色を呈する。接合面で外れている。226～229、231は褐鉄鉱が付着している。

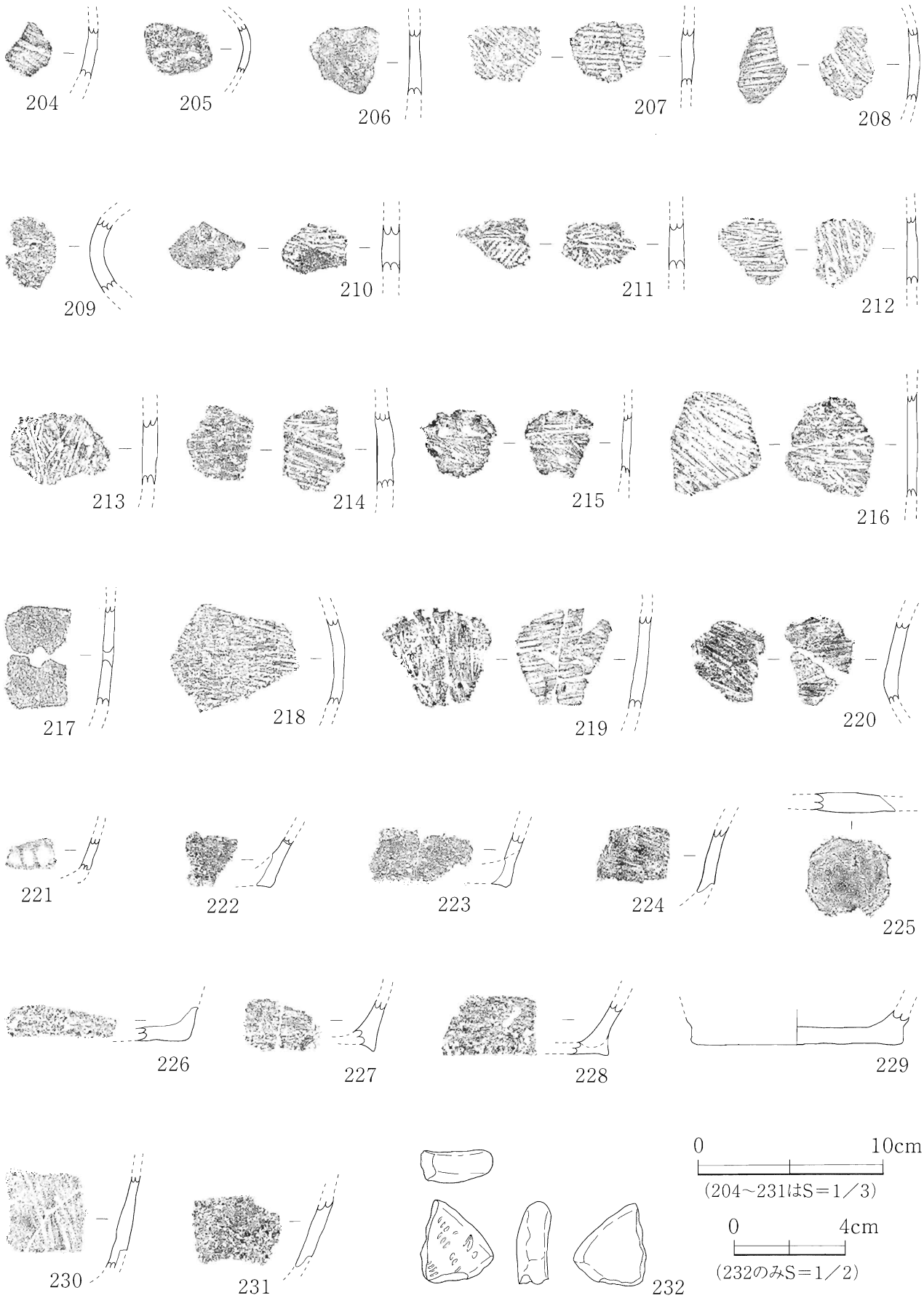
第11図－224、230は外器面が浅い条痕、内器面がナデで調整されている。224は胎土中に1㎜以下の石英を若干含む。色調は外器面がにぶい橙色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。接合面で外れている。230は胎土中に2㎜以下の長石、石英を若干含む。1㎜以下の金雲母、黒雲母を含む。色調は外器面が橙色、内器面が黒褐色を呈する。底部が接合面で剥がれ落ちている。また224、230は褐鉄鉱が付着している。

第11図－225は内器面がナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の石英、金雲母を含む。色調は外器面が褐灰色、内器面が灰黄褐色を呈する。接合面で外れている。

2．土製品（第11図－232、図版11）

第11図－232はO－28区の4層から出土した土製品である。

232は表面に工具による刻み目を施し、裏面はナデで調整されている。胎土中に1㎜以下の長石、黒雲母、金雲母を含む。色調は表面がにぶい褐色、裏面が灰褐色を呈する。表裏面に褐鉄鉱が付着している。一部のみが残存しており、現存としては長さ2.8㎝、幅2.4㎝、厚さ1.1㎝、重さ8.3gである。形状としてはわずかに反りを持ち、刻み目は浅い。（山中　将士）



第11図　出土土器・土製品実測図

3．石器（第12～14図、図版12、13）

今回出土した石器の総数は416点あり、そのうち製品を中心に54点を掲載する。その内訳は、石鏃21点、スクレイパー２点、二次加工のある剥片１点、打製石斧１点、磨製石斧２点、磨石・敲石類２点、石皿２点、石錘23点である。その他に石鏃未製品３点、石核２点、磨製石斧刃部破片１点などが出土しているが、図示していない。欠損しているものについては、現存の法量を明記した。

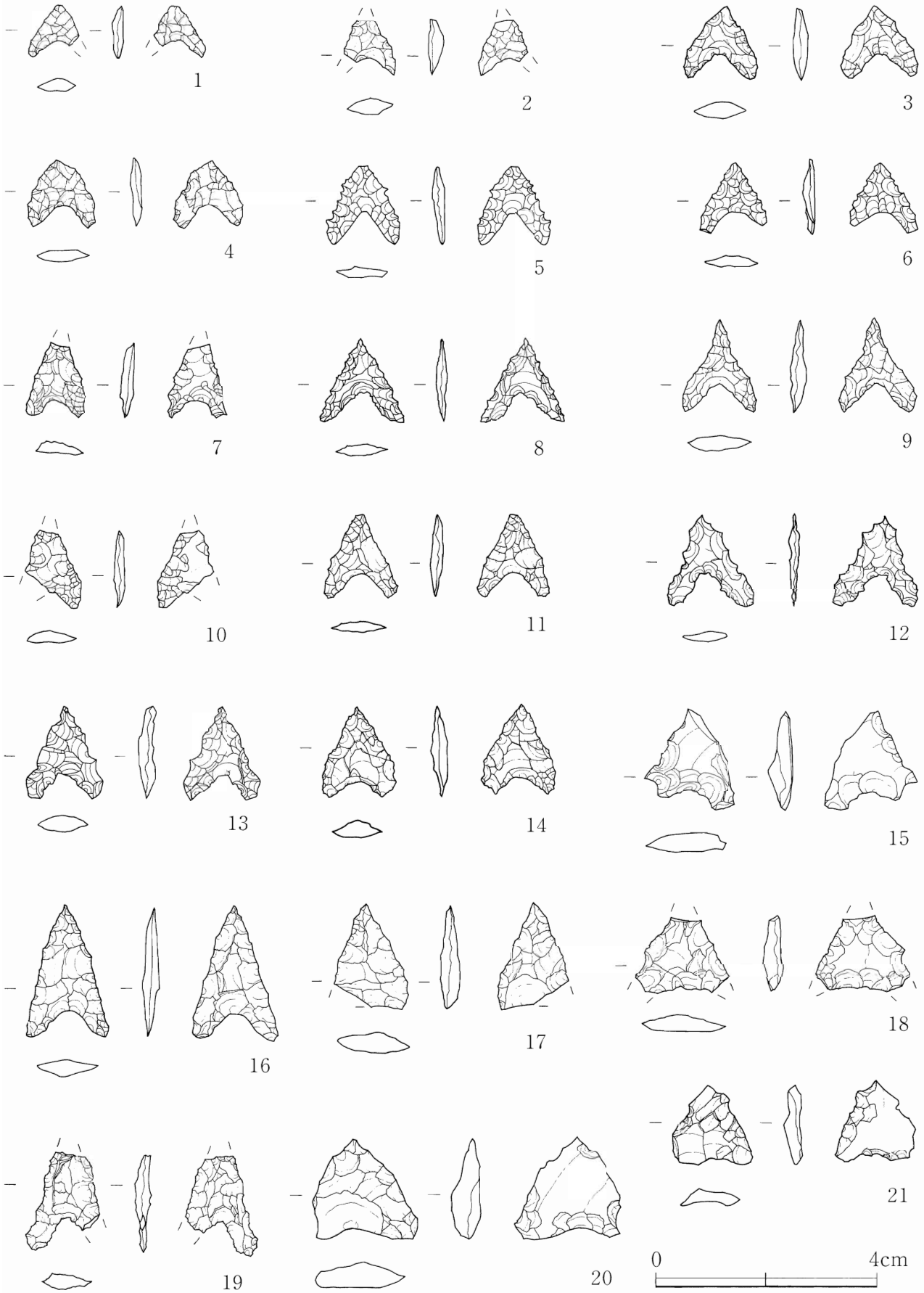
石器の出土位置については次の通りである。N－27区では４層から、第12図－20、第13図－30、31、第14図－41が出土している。N－27区では４層上面から、第12図－17が出土している。N－29区では４層から、第12図－５、第14図－48、52、53が出土している。O－27区では４層上面から、第12図－11、第13図－26、29、第14図－37が、４層からは第12図－７、19、第14図－32が出土している。O－28区では４層から、第12図－６、13が出土している。O－29区では４層から、第12図－21、第13図－22、28が出土している。

また調査区全体から一括で、４層からは第12図－３、８、10、15、16、第14図－33、35、38、42、43が出土している。１層および２層からは第12図－１、４、９、14、18、第13図－23～25、27、第14図－34、36、39、40、44～47、49～51、54が出土し、３層からは第12図－２が出土している。壁清掃土からは第12図－12が出土している。

石鏃（第12図－１～21）

今回の調査では未製品も含めると、24点の石鏃が出土している。そのなかで、21点について掲載した。石鏃の重さの平均は、0.4gである

第12図－１は片方の脚部が欠損している。石材は珪質安山岩である。長さ0.9cm、幅0.9cm、厚さ0.2cm、重さ0.1gと今回の調査の中で最も小さい石鏃である。２は片方の脚部と先端が欠損している。石材は珪質安山岩である。長さ1.0cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm、重さ0.2gである。３は完形品で、石材は姫島産黒曜石である。長さ1.3cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.3gである。褐鉄鉱が付着している。４は完形品で、石材は姫島産黒曜石である。長さ1.3cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、重さ0.2gである。細かい剥離で整形している。５は完形品で、鋸歯状の刃部をもつ。石材は姫島産黒曜石である。長さ1.5cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm、重さ0.3gである。６は完形品で、石材は姫島産黒曜石である。長さ1.3cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、重さ0.2gである。細かい剥離で鋸歯状の刃部を作り出している。７は先端が欠損している。石材は姫島産黒曜石である。長さ1.4cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ0.4gである。腹面に主要剥離面が残り、基部を中心に整形している。８は完形品で、石材は珪質安山岩である。長さ1.6cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm、重さ0.3gである。両側縁に両側から細かい剥離を施して鋸歯状の刃部を作り出している。９は完形で深い抉りをもつ。石材は珪質安山岩である。長さ1.7cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.3gである。細かい剥離で整形して先端を細く作り出している。10は片方の脚部と先端が欠損している。石材は水晶である。長さ1.4cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm、重さ0.2gである。腹面は主要剥離面が残り、右側縁には細かい剥離がみられない。11は完形品で、石材は珪質安山岩である。長さ1.5cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、重さ0.3gである。12は完形品で、石材は珪質安山岩である。長さ1.7cm、幅1.6cm、厚さ0.2cm、重さ0.3gである。両面から細かい剥離で整形して、鋸歯状の刃部を作り出している。13は完形品で、石材は姫島産黒曜石である。長さ1.7cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.4gである。14は完形品で、石材は珪質安山岩である。長さ1.7cm、幅1.3cm、厚さ0.3



第12図　出土石器実測図（1）

cm、重さ0.4gである。細かい剥離を加えて整形している。15は未製品で、石材は姫島産黒曜石である。長さ1.8cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ0.7gである。両面に主要剥離面が残り、主に基部周辺に剥離を加えている。16は完形品で、石材は珪質安山岩である。長さ2.4cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.7gと他の石鏃に比べてかなり大きい。細かい剥離で丁寧に整形している。17は基部の一部が欠損している。石材は珪質安山岩である。長さ2.0cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ0.7gである。細かい剥離で整形しており、唯一基部に抉りをもたないものである。18は両脚と先端が欠損している。石材は珪質安山岩である。長さ1.3cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm、重さ0.7gである。19は片方の脚部と先端を欠損している。石材は珪質安山岩である。長さ1.8cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.6gである。長い脚をもち、やや粗い剥離で整形している。20は未製品で、石材は珪質安山岩である。長さ1.8cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm、重さ1.4gである。腹面に主要剥離面が残り、背面右側縁のみ刃部が作り出されている。21は未製品で、石材は珪質安山岩である。長さ1.4cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.3gである。腹面は主要剥離面が残り、右側縁には剥離を施していない。

スクレイパー（第13図－23、24）

第13図－23、24はスクレイパーである。23は刃部である下端部が使用により潰れている。腹面はポジティブな主要剥離面である。石材は珪質安山岩である。長さ2.9cm、幅4.1cm、厚さ0.9cm、重さ8.2gである。24は上端部に自然面が残る。長さ4.1cm、幅8.4cm、厚さ1.5cm、重さ44.5gである。主に背面を粗い剥離で整形した後、下端部に細かい剥離を施して刃部を作り出している。

二次加工のある剥片（第13図－22）

第13図－22は二次加工のある縦長剥片である。背面の右側縁は自然面であり、左側縁には細かな剥離が施される。ポジティブな主要剥離面が残る。下端部は切断されている。石材は珪質安山岩である。長さ5.4cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm、重さ11.9gである。

石斧（第13図－25～27）

第13図－25は短冊形の打製石斧である。全体的に磨滅しているが、腹面下端部には使用による磨耗がみられる。長さ9.3cm、幅4.8cm、厚さ2.1cm、重さ115.4gである。粗い剥離で整形している。

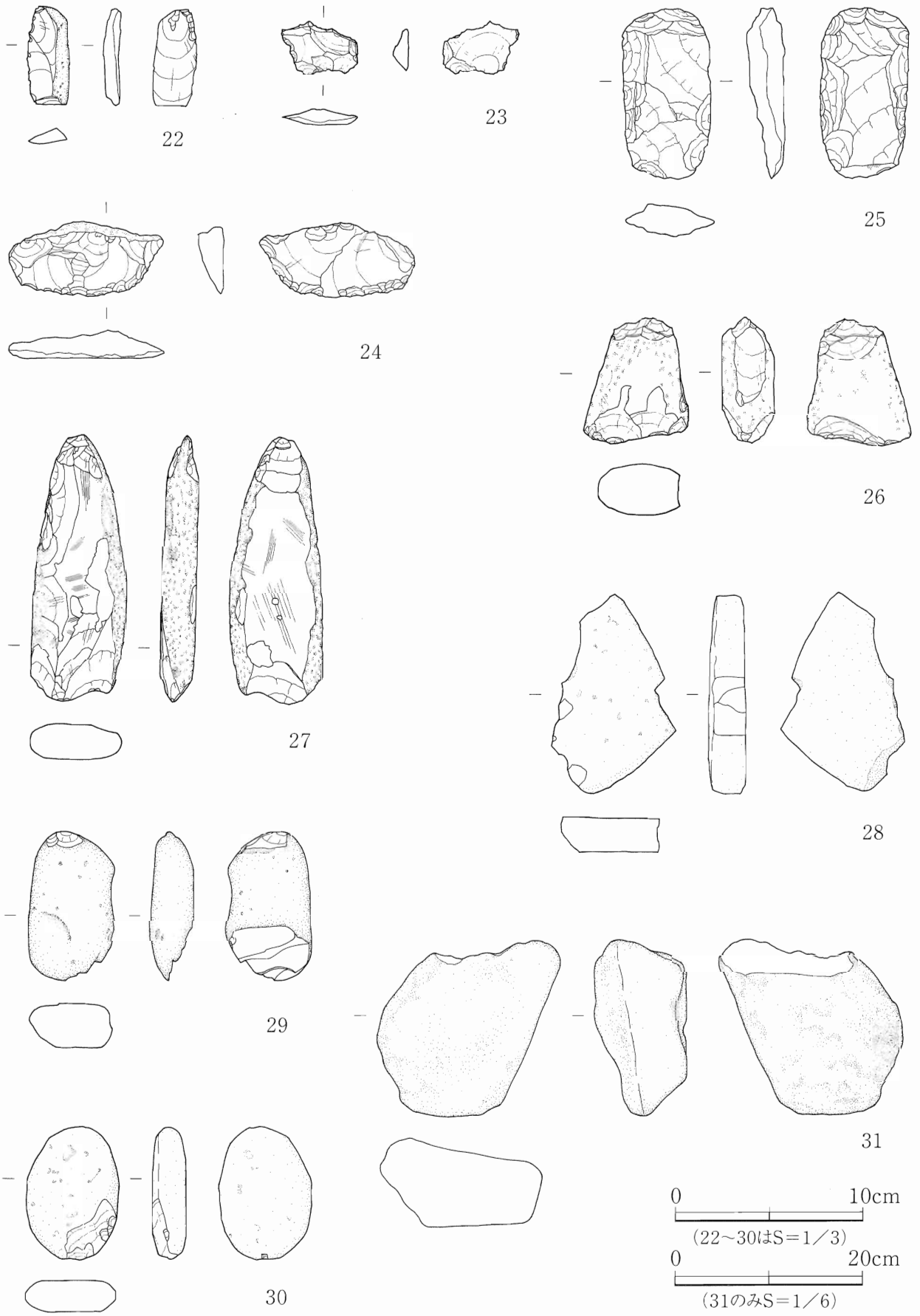
第13図－26、27は磨製石斧である。26は刃部が残っておらず、敲石に転用されている。長さ6.8cm、幅5.6cm、厚さ2.8cm、重さ148.5gである。27は乳棒状を呈する。刃部が破損している。長さ14.6cm、幅5.0cm、厚さ1.9cm、重さ216.5gである。（油利　崇）

磨石・敲石類（第13図－29、30）

第13図－29は上端部と下端部が剥離している。上端部の剥離は磨滅がみられるが、下端部の剥離には殆ど磨滅がみられず、新しいものである。長さ8.1cm、幅4.7cm、厚さ2.3cm、重さ129.6gである。30は下端部の剥離に磨滅がみられ、使用の痕跡は器面全体にみられる。長さ7.3cm、幅5.0cm、厚さ1.8cm、重さ77.9gであり、褐鉄鉱が付着している。

石皿（第13図－28、31）

第13図－28は石皿の一部で、実測図左側の面に使用の痕跡がみられる。実測図右側の面は割れ面で、長さ9.8cm、幅6.7cm、厚さ2.0cm、重さ168.3gである。31は実測図左側の面の中央付近に使用の痕跡がみられる。上端部付近が欠損している。長さ19.1cm、幅19.7cm、厚さ9.9cm、重さは4,260gである。



第13図　出土石器実測図（２）

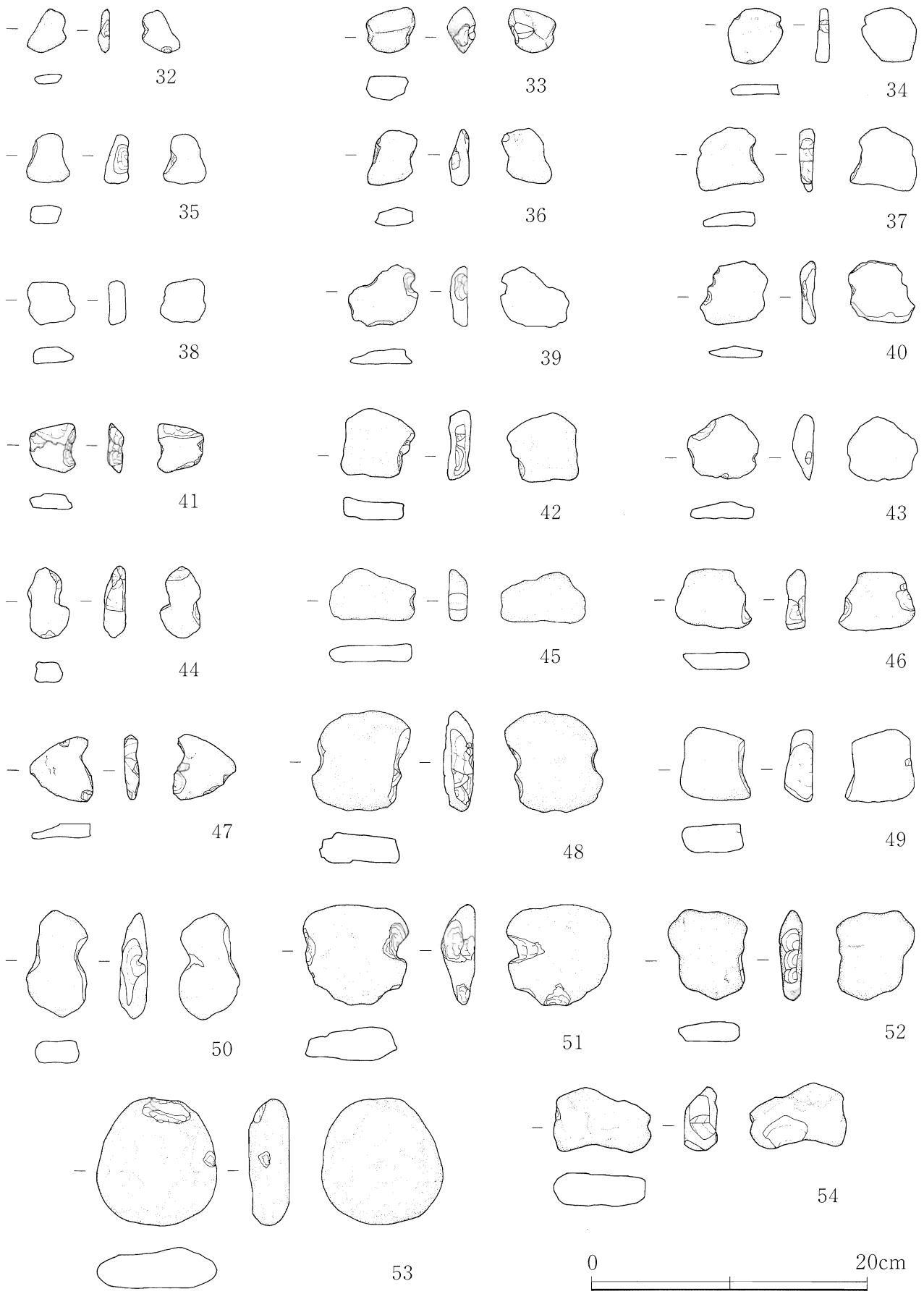
石錘（第14図－32～54）

石錘は今回の調査で出土したものを全点掲載した。

小型のものが主で、大きさが10㎝を越えるものは出土せず、平均で長さ5.1㎝、幅5.0㎝であった。重さの平均は63.8gであった。

第14図－32は実測図左側の右側面を打ち欠いていて、左側縁に１ヶ所の抉りを持つ。長さ3.2㎝、幅2.8㎝、厚さ0.8㎝、重さ8.1gであり、表面に褐鉄鉱が付着している。33は実測図左側の右側縁に打欠を持ち、左側縁に１ヶ所の抉りを持つ。長さ3.9㎝、幅3.5㎝、厚さ2.0㎝、重さ25.3gである。34は実測図左側の両側縁を各１ヶ所打ち欠いていて、右側縁と下端部に各１ヶ所の抉りを持つ。長さ4.0㎝、幅3.9㎝、厚さ1.0㎝、重さ23.4gであり、表面に褐鉄鉱が付着している。35は両側縁を各１ヶ所打ち欠いている。長さ3.6㎝、幅3.1㎝、厚さ1.7㎝、重さ23.2gである。36は両側縁に各１ヶ所の打欠を持つ。長さ4.1㎝、幅3.6㎝、厚さ1.4㎝、重さ23.0gである。37は両側縁に各１ヶ所の打欠を持つ。長さ4.7㎝、幅4.9㎝、厚さ1.0㎝、重さ34.7gである。38は実測図左側の左側縁に１ヶ所、右側縁に２ヶ所という３ヶ所の抉りを持つ。長さ3.2㎝、幅3.4㎝、厚さ1.2㎝、重さ19.2gである。39は両側縁と、両端部に各１ヶ所という４ヶ所の打欠を持つ。長さ4.4㎝、幅5.0㎝、厚さ1.2㎝、重さ27.8gである。40は実測図左側の左側縁に３ヶ所、右側縁に１ヶ所という４ヶ所の打欠を持つ。実測図右側の面は割れ面である。長さ4.6㎝、幅4.9㎝、厚さ1.1㎝、重さ26.4gである。41は両側縁に各１ヶ所の打欠を持ち、両端部を打ち欠いて整形している。長さ3.6㎝、幅3.4㎝、厚さ1.1㎝、重さ17.2gである。42は実測図左側の左側縁には擦り跡がみられ、右側縁に打欠を１ヶ所持っている。長さ5.2㎝、幅5.3㎝、厚さ1.6㎝、重さ57.1gであり、表面に褐鉄鉱が付着している。43は実測図左側の左側縁に１ヶ所の打欠と、両側縁に各１ヶ所の抉りを持つ。長さ4.8㎝、幅5.1㎝、厚さ1.5㎝、重さ39.1gである。44は両側縁に各１ヶ所の打欠を持ち、両端部を打ち欠いて整形している。長さ5.2㎝、幅3.0㎝、厚さ1.6㎝、重さ31.0gである。45は実測図左側の右側縁を打ち欠き、左側縁と両端部に各１ヶ所の抉りを持つ。長さ3.2㎝、幅6.2㎝、厚さ1.3㎝、重さ51.8gである。46は両側縁に各１ヶ所の打欠を持つ。長さ4.4㎝、幅5.6㎝、厚さ1.4㎝、重さ50.2gである。47は両側縁に各１ヶ所の打欠を持つ。周縁部に剥離が施されている。長さ4.7㎝、幅4.6㎝、厚さ1.0㎝、重さ26.2gである。48は実測図左側の左側縁に１ヶ所、右側縁に２ヶ所という３ヶ所の打欠を持つ。長さ7.4㎝、幅7.1㎝、厚さ2.2㎝、重さ154.7gであり、表面に褐鉄鉱が付着している。49は両側縁に各１ヶ所の打欠を持つ。長さ5.3㎝、幅5.1㎝、厚さ2.1㎝、重さ87.3gである。50は両側縁に各１ヶ所の打欠を持つ。長さ7.7㎝、幅4.5㎝、厚さ2.0㎝、重さ81.0gである。51は両側縁に各１ヶ所と、下端部に１ヶ所の打欠を持つ。長さ8.4㎝、幅7.7㎝、厚さ2.4㎝、重さ163.3gである。52は実測図右側に打欠を持ち、左側縁と両端部に各１ヶ所の抉りを持つ。長さ7.6㎝、幅5.7㎝、厚さ1.6㎝、重さ79.0gである。53は実測図左側の右側縁と上端部に各１ヶ所の打欠を持つ。全体的に磨滅している。長さ9.2㎝、幅8.8㎝、厚さ2.9㎝、重さ315.8gであり、表面に褐鉄鉱が付着している。54は両側縁と上端部を各１ヶ所打ち欠いていて、下端部に１ヶ所の抉りを持つ。長さ4.7㎝、幅7.0㎝、厚さ2.4㎝、重さ101.5gである。

（高畑　あゆみ）



第14図　出土石器実測図（3）

第四章　考　　察

1．遺構について

今回の調査では、建物跡（住居址か？）の一部と思われる柱穴列Ｐ－01～05と、土坑SK－01が検出されている。

今回検出した建物跡は上面が削平されているため、掘り込みの有無は確認できない。柱穴列から復原すると、平面プランは円形もしくは楕円形であると考えられる。円形の場合に推定される面積が約32㎡である事を考えると、中国地方における住居址の検出例の平均面積（山田2002）よりも広くなり、大型のものであるといえる。

SK－01は、土器と骨粉を出土しているのみで、焼土や炭化物は検出されていない。遺構の上部については削平されているため不明であるが、埋土に分層がみられず、骨粉が出土していることから、土坑墓である可能性も考えられる。しかし骨粉が人骨か獣骨起源のものであるかがはっきりとしていないので、土坑の性格は特定できない。

土坑は建物跡の内側に位置しており、建物跡に伴うと思われる。建物跡の中に土坑が検出されている例は、岡山県佐藤遺跡（竹田1978）、吉野口遺跡（草原・河田1997）、島根県石田遺跡（池淵編1998）、前田中遺跡（渡辺編1995）、山口県上原田遺跡（井上・白岡・西岡1995）などがあげられる。本例もこれらに類似したものと考えられるが、遺構の上面が削平されているため、土坑が建物跡に伴うものかどうか明確な判断を下すことが困難である。なお建物跡及び土坑の時期については、周辺の遺物から縄文時代後期～晩期のものと考えられる。　（三谷　早希子）

2．遺物について

土器

今回の調査では縄文土器2,497点が出土したが、細片が多く、詳細な検討を加えることは難しいが、特徴のある資料について以下に若干の考察を試みたい。

以前から石ヶ坪遺跡では、九州系の並木式、阿高式土器と在地の中津式土器との共伴関係が指摘され、並木式、阿高式が従来の土器編年より時期が下るのではないかと論じられてきた（渡辺編2000）。今回の調査目的の一つも、九州系の土器と在地の土器との関係を明らかにすることであった。

本調査で出土したものでは、第８図－127は阿高式、133は並木式と考えられ、他にも細片だが滑石を含んだ土器が出土しており、九州系土器の存在が見てとれる。しかし、滑石を含む土器は全部で49点であり、出土土器全体の約２％と少ない。第８図－131は、滑石は含んでいないが、文様は阿高式のものと見られ、九州系土器の影響がうかがえる。第６図－37は口唇部に刻み目、外器面に刺突が施され、第４次調査でも類似した土器が出土している（山田編2003、第９図－９）。

Ⅳ－Ａ－ａ類、Ａ－ａ類の多くは、広義の中津式だと考えられる。例えば、第６図－31、32、第８図－120、126、第９図－172などがそうであろう。Ⅳ－Ｂ－ａ類、Ｂ－ａ類の中にも中津式と思われる土器が存在する。第７図－83、85、86、や第８図－128、132などが中津式と考えられる。また、第６図－31、第７図－79は、口唇部直下に縄文が施文されており、中津式の中でもより古相を示すものと

考えられる。

上記のように、今回の調査でも第１次、第２次調査同様に、並木式、阿高式と中津式がともに出土するという状態がうかがえる。しかし、今回の調査では以下のような中期末ごろまで遡る可能性のある土器が出土した。第７図－84は波状口縁に２つの刻み目隆帯を持つが、外器面が磨滅しているため、地文に縄文を持つかどうかが明確ではない。また、細片ではあるが第７図－73も隆帯に刻み目を持ち、同類の土器の波状口縁波頂部と思われる。

過去の調査では、石ヶ坪遺跡で中期に位置付けられる在地の土器はほとんど出土していなかったが、今回上記のような中期末に属する土器が出土したことで、石ヶ坪遺跡が中期から存在していた可能性が出てきた。

同じ匹見町内では、匹見川下流の河岸段丘上に立地する田屋ノ原遺跡からも、船元Ⅳ式土器と並木式土器がともに出土している（渡辺編2001）。匹見町における中期の土器の再検討が必要であろう。

その他には、第６図－38は文様構成から見て、中津式から福田ＫⅡ式にかけての土器と思われる。しかし、黒色で内外器面ともミガキ調整されている点は気になるところである。第７図－61、67は出水貝塚出土土器に同類のものが見られ（岩崎・堂込編2000、第32図－210、211、第61図－578）、出水式並行のものと思われる。あるいは北久根山式土器とも考えられるが、細片のため型式の特定は難しい。第10図－201は器壁が薄く、外器面に丁寧なミガキ調整が施されている。後期後半から晩期初頭のものと考えられる。無文土器Ｂ－ｂ類には器面が条痕調整されているものがあり、後期から晩期にかけての粗製土器と考えられる。

以上のことから、今回出土した土器の時期は、おおむね縄文時代後期初頭および晩期前半を中心とするものといえるだろう。また、型式を特定できる有文土器を見る限りでは、中津式土器が大半を占め、中津式以降、晩期に続く土器がほとんど見当たらないという様相を呈している。これは、中津式期に石ヶ坪遺跡における生業活動の規模がピークを迎えたということであろうか。

本調査での包含層は４層のみであり、土器を層位的に分離することはできなかったが、出土した土器を見ると、以下のような想定ができる。石ヶ坪遺跡が中期末に九州系土器を伴いながら、その後、後期初頭の頃に隆盛してくるという考え方である。第１次調査地点で出土した土器の中には、中津式土器と阿高式系土器の折衷土器と考えられるものがあり（足立1987、第７図－９）、九州系土器が在地の土器に何らかの影響を与えていたことは確かであろう。

残念ながら、今回の調査で出土した並木式、阿高式土器は数が限られているのが現状である。今後、石ヶ坪遺跡や周辺の遺跡から出土する資料の増加を待ってから、詳細な検討を加えることが肝要であろう。

（佐海　由美子）

土製品

第11図－232に図示した１点の破片のみである。形態から分銅形土偶ではないかと考えられる。同じ匹見町のヨレ遺跡と水田ノ上Ａ遺跡からも土偶が出土している。ヨレ遺跡の土偶は１点で上半部のみ残存した物で、頭部と手部が三角状を為す「奴凧形」土偶と言われるものである（渡辺1993）。分銅形に比べ頭部と手部の作り出しが明瞭である。水田ノ上Ａ遺跡の土偶は２点発見されていて、１つは表採されたものである。表採されたものはほぼ完形の板状小形土偶であり、臀部が丸くおさまるものとみられる。もう１つは集石遺構内より出土したもので、胸部の破片と見られる（渡辺編

1991)。これら同じ匹見町内で発見された土偶は３点とも、深田氏が主張する腰を示すくびれと四肢の省略を定義の要とする「分銅形土偶」から派生したものと考えられる（深田2002)。今回出土した土製品はより分銅形に近いものの一部であると考えられ、ヨレ、水田ノ上両遺跡の土偶に先行する可能性がある。また、ヨレ遺跡と水田ノ上Ａ遺跡で見つかった土偶の時期はすべて後期後葉に比定される（深田2002)。加えて文様が同じ様に周縁に沿って施される分銅形土偶の例として大分県佐知遺跡と香川県ナカンダ浜遺跡が挙げられる。佐知遺跡では２点出土しており、沈線を三条施し、その間に縄文と刺突文を施すものと、周縁に沿って刺突文を二列施すものがある（坂本1989、中村2000)。ナカンダ浜遺跡でも２点出土しており、沈線と刺突文が目立ち、乳房の表現はない（深田2000)。共に文様は違うが、分銅形のものの周縁部分に施文されている点で、今回出土した土製品に類似している。これらはすべて後期中葉に比定されている（中村2000)。これらのことから今回出土した土製品も後期中葉の時期に比定出来るかもしれない。（山中　将士）

石器

今回の調査では、石鏃21点、スクレイパー２点、二次加工のある剥片１点、打製石斧１点、磨製石斧２点、磨石・敲石類２点、石皿２点、石錘23点の石器を図示した。第１次調査（渡辺編1990)、第２次調査（渡辺編2000）で大量に出土している打製石斧、磨製石斧はそれぞれ１点、２点にとどまっている。石斧は、今回の調査区にほど近い第１次調査のＤ地区では12点、第２次調査のＩ区では18点出土している。これらとの違いは単なる調査地点の違いだけとは言い切れない。また、第４次調査に類似して数の上で石鏃、石錘が石器組成の大半を占めている。以下に今回の調査で出土した石器についての若干の考察を行なう。

石鏃の完成品は、重さから大小２群に分けることができる。小型の群は18点中14点で重さ0.4g以下に入り、その大きさは長さ1.8㎝以下、幅1.6㎝以下である。第12図－１～14が該当する。小型の群はすべてに深い抉りを施されている点に斉一性がみられる。大型の群は重さ0.7g以上で、第12図－16～19が該当する。石材はすべて珪質安山岩のものである。石鏃の未製品は第12図－15、20、21の３点である。調整方法についてみてみると、背面に調整剥離が多く施され、しかも基部の調整を行なってから側縁部を調整している。

また、石鏃の石材は24点中13点が珪質安山岩で、その他は１点の水晶をのぞいて姫島産黒曜石である。姫島産黒曜石の製品は小型の石鏃にしかなく、出土した剥片も長さ１㎝程度のものばかりである。また、珪質安山岩は小型のものから大型のものまで多様な様相を示し、スクレイパーなどにも使用されている。このことから姫島産黒曜石と珪質安山岩には石材による明確な使い分けが存在していたと考えられる。それは石ヶ坪遺跡に搬入されてきた姫島産黒曜石が小さなものばかりであったからかもしれない。さらに今回の調査では黒褐色の黒曜石が全くみられない一方で、乳白色の姫島産黒曜石が出土しているということも石材の流通を考える上で九州との強いつながりを想定できる。

スクレイパーは２点出土しており、どちらも珪質安山岩でつくられている。第13図－24は細かい剥離で丁寧に刃部を作り出しており、長さ、幅がちょうど手のひらにおさまる大きさになっている。第１次調査で出土したスクレイパーが穂摘具の類である可能性を指摘されているが（渡辺編1990)、何に使用されていたかについては、使用痕分析を行なった上で慎重に決めていきたい。

打製石斧は全体的に磨滅しており装着痕は確認できないが、刃部が使用により磨耗していることか

ら掘り具の可能性がある。石ヶ坪遺跡で出土している打製石斧は長さ10cm程度のものばかりであり、同じ匹見町の水田ノ上遺跡、ヨレ遺跡で長さ20cm程度の大型の打製石斧が出土してしているのとは様相が異なる（渡辺編1991、渡辺・矢野編1993）。

石錘についても形や抉りの位置には斉一性が見られないが、重さから大小３群に分けることができる。重さ40g以下の群は第14図－32～41、43、44、47が該当する。最も数が多い一群で、特に20～30g程度のものが大半を占める。50g～110gの群は第14図－42、45、46、49、50、52、54が該当する。150g以上の群は第14図－48、51、53が該当する。これらは第14図－53が315.8gである以外は300g以内におさまっており、山陰における河川流域から出土する石錘の特徴と一致する（會下2000）。

（油利　崇）

引用文献

足立克己 1987「山陰石見地方における縄文後期前～中葉土器について」『東アジアの考古と歴史』中巻、同朋舎、138頁

池淵俊一編 1998『石田遺跡Ⅲ』島根県教育委員会

井上広之・白岡　太・西岡義貴 1995『上原田遺跡』山口県教育委員会

岩﨑新輔・堂込秀人編 2000『出水貝塚－重要遺跡確認発掘調査に伴う発掘調査報告書』鹿児島県出水市教育委員会

會下和宏 2000「縄文時代の石錘－前期を中心に－」『島根大学構内遺跡第10次調査（橋本地区３）』島根大学埋蔵文化財調査研究センター、73～81頁

草原孝典・河田健司 1997『吉野口遺跡』岡山市教育委員会

坂本嘉弘編 1989『佐知遺跡』大分県教育委員会

竹田　勝 1978『佐藤遺跡』岡山県教育委員会

中村健二 2000「近畿地方における縄文時代後期土偶の成立と展開」『土偶研究の地平（４）』「土偶とその情報」研究会、169頁～194頁

深田　浩 2000「中国・四国地方の後・晩期土偶」『土偶研究の地平（４）』「土偶とその情報」研究会、247頁～266頁

深田　浩 2002「中国地方の土偶について」『下山遺跡（２）－縄文時代遺構の調査－』国土交通省中国地方整備局、島根県教育委員会、214～224頁

山田康弘 2002「中国地方の縄文時代集落」『島根考古学会誌』第19集、島根考古学会、１～32頁

山田康弘編 2003『石ヶ坪遺跡発掘調査概報Ⅱ』島根大学法文学部考古学研究室

渡辺友千代編 1990『石ヶ坪遺跡』匹見町教育委員会

渡辺友千代編 1991『水田ノ上Ａ遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡』匹見町教育委員会

渡辺友千代編 1995『前田中遺跡』匹見町教育委員会

渡辺友千代編 2000『石ヶ坪Ａ遺跡』匹見町教育委員会

渡辺友千代・矢野健一編 1993『ヨレ遺跡・イセ遺跡・筆田遺跡』匹見町教育委員会

第五章　ま　　と　　め

今回の調査の目的の一つとして、九州系の縄文土器と在地の縄文土器の時期的な関係を把握するということがあった。また、縄文時代の建物跡を検出し炭化種子を採取することで、当時の植物利用のあり方について検討することも目的としていた。調査の結果、多数の縄文土器を中心とする遺物が出土し、さらに一部ではあったが建物跡を検出することができた。ここで、今回の成果についてとりまとめておく。

調査は２週間という短い期間のために、36㎡という小規模な調査区内で行なわれた。前回の第４次調査の際に、第１次調査の調査区を確認しており遺跡内における各調査区の位置関係はおおよその見当がついていた。したがって、建物跡を検出するために、第１次調査で住居址が検出され比較的遺物も豊富に出土した地点に隣接するように調査区を設定した。結果、今回の調査区内でも第１次調査の調査区の一部を確認することができた。また、今回の調査期間内に発掘調査と並行して周辺の測量調査も実施したので、石ヶ坪遺跡の各調査区の位置関係及び現状での周辺地形との位置関係を明確におさえることができた。

次に、今回の調査では水田の床土層の下に比較的多くの遺物を内包した包含層を検出した。さらに、その上面では遺構として建物跡の一部と考えられる柱穴５基と土坑１基を確認した。建物跡は円形に柱穴をめぐらせており、半分は調査区外に続くものと考えられる。ただし、柱穴の深さは比較的浅く、直上には水田の床土層があった。これらのことから、包含層は本来はもっと高い位置まであったが耕作によって削平されたものと判断した。また、建物跡の床面自体も削られており、確認することができなかった。したがって、竪穴建物であったのか、あるいは平地式の建物であったのかは不明である。建物の時期としては、周辺の出土遺物などから縄文時代後期～晩期と考えられた。この建物跡を復元すれば、中国地方における縄文時代の建物跡としては大型のものとなる。第１次調査の報告書においても、石ヶ坪遺跡の建物跡が大型である傾向は指摘されており、今回の調査でもそのことを確認することができた。一方、土坑は建物跡の内部にあたる位置で確認された。この土坑も浅いもので、おそらく底の部分のみが残っていたものであろう。他の遺跡の類例から建物跡に伴うものと考えられる。土坑の埋土は持ち帰っておりウォーターフローテーションにかける予定である。

遺物は水田の床土の下の包含層が検出されるようになると調査区一面において出土した。多くは小片ではあったが、中には比較的大きな破片も含まれていた。問題とされている滑石が混入された九州系の縄文土器が出土しており、在地の縄文時代後期初頭の中津式もともに出土した。但し、縄文時代晩期の土器も出土しており、同一層内に複数の時期の土器が混在する状況であった。従って、良好な層位的な出土状況の検討から、遺物の時期的な関係を検証することは今回の調査ではできなかった。

その他に、九州系の滑石混入土器や中津式とは区別され、なおかつ縄文時代中期末に遡る可能性のある土器が２点出土した。これらが中期末の土器であることを支持すれば、九州系の土器や中津式以外にもそれらに接する時期の土器が存在し、石ヶ坪遺跡ではその時期の土器の出土量が少ないにすぎないという想定ができるのかもしれない。そうならば、九州系の土器と中津式が時期的に接近する必要はなくなる。しかし、これは周辺地域の土器編年とも照らし合わせながら検討した上で論じるべき事である。ここでは、石ヶ坪遺跡における縄文時代中期末の様相の解明が今後とも課題である点を指

摘しておく。

次に、石ヶ坪遺跡から出土した九州系の滑石混入土器は文様などから型式学的に本場の九州から出土する土器と区別されるべきで在地化した土器であろう。もし滑石自体が九州地方のものではなく中国地方のものであることが明らかになれば、その土器は九州の滑石混入土器を理解している人々によって中国地方で作られた可能性が考えられる。さらに、大分県の姫島産黒曜石が出土している点も注目される。このことは土器の型式という一文化的要素のみではなく、その他の面でも九州地方の影響が確認できるということである。なおかつ、土器の在地化にみるように九州地方とも全く同一な状況ではない点を考慮すれば、単に九州の土器が中国地方の一部にまで広がっていただけではなく、九州のある集団が石ヶ坪遺跡に移住してきた可能性も考えられるのである。

九州地方の影響がみられる遺物で注目されてきた石ヶ坪遺跡であるが、石器のあり方の面でも興味深い。第1次・第2次調査において多くの打製石斧が出土しており「縄文農耕」の可能性を示唆する。今回の調査でも数は少ないが打製石斧が出土している。その他に、今回の調査では石鏃と石錘が多数出土した。石鏃は比較的小型のもののみであり、姫島産の黒曜石はより小さな一群の石鏃のみに使用されており、どの製品に対してどの石材を用いるかについて規則性があったものと考えられる。その他に石核や石鏃未製品なども出土している。石錘は大きさ、形状などの点で多様でありそれぞれに別々の使用法を想定するべきかもしれない。点数としてこれらの石器が多数を占めるのは、その使用法を考えると当然のことである。一方、このような狩猟・漁撈具の他に磨製石斧、スクレイパー、磨石・敲石、石皿などの一般的な器種の石器が揃っている。従って、石ヶ坪遺跡は狩猟の際の作業場などのような特化した所ではなく、様々な作業が行われる日常的な生活が営まれた場であった事が石器組成の面から認められるのである。

以上が今回の調査の概要である。

3回にわたった島根大学考古学研究室による石ヶ坪遺跡の発掘調査は今回で終了した。調査の目標の大きな柱に「縄文農耕」の実証という課題を据えたが、その他にも研究テーマとなりうる面を石ヶ坪遺跡はもっていた。姫島産黒曜石による小型の石鏃や多様な形状の石錘は山間部での生業のあり方を考える上で良い資料となるだろう。また、九州系の滑石混入土器は土器の移動、あるいは人間の移動に関わる問題に対する格好の研究材料となるに違いない。そういった多岐にわたる問題を内包する石ヶ坪遺跡を発掘できたことは、私たち学生にとって貴重な経験であった。今回の調査・報告書作成から学びとったことを今後に生かしていきたい。

3年間、匹見町の方々には多方面にわたってお世話になった。調査が無事に終了できたのは匹見町教育委員会をはじめとする役場の方々、遺跡や宿舎周辺の町民の方々のご協力の賜物である。末筆ながらここに記して感謝申し上げる。

（厚見　崇）

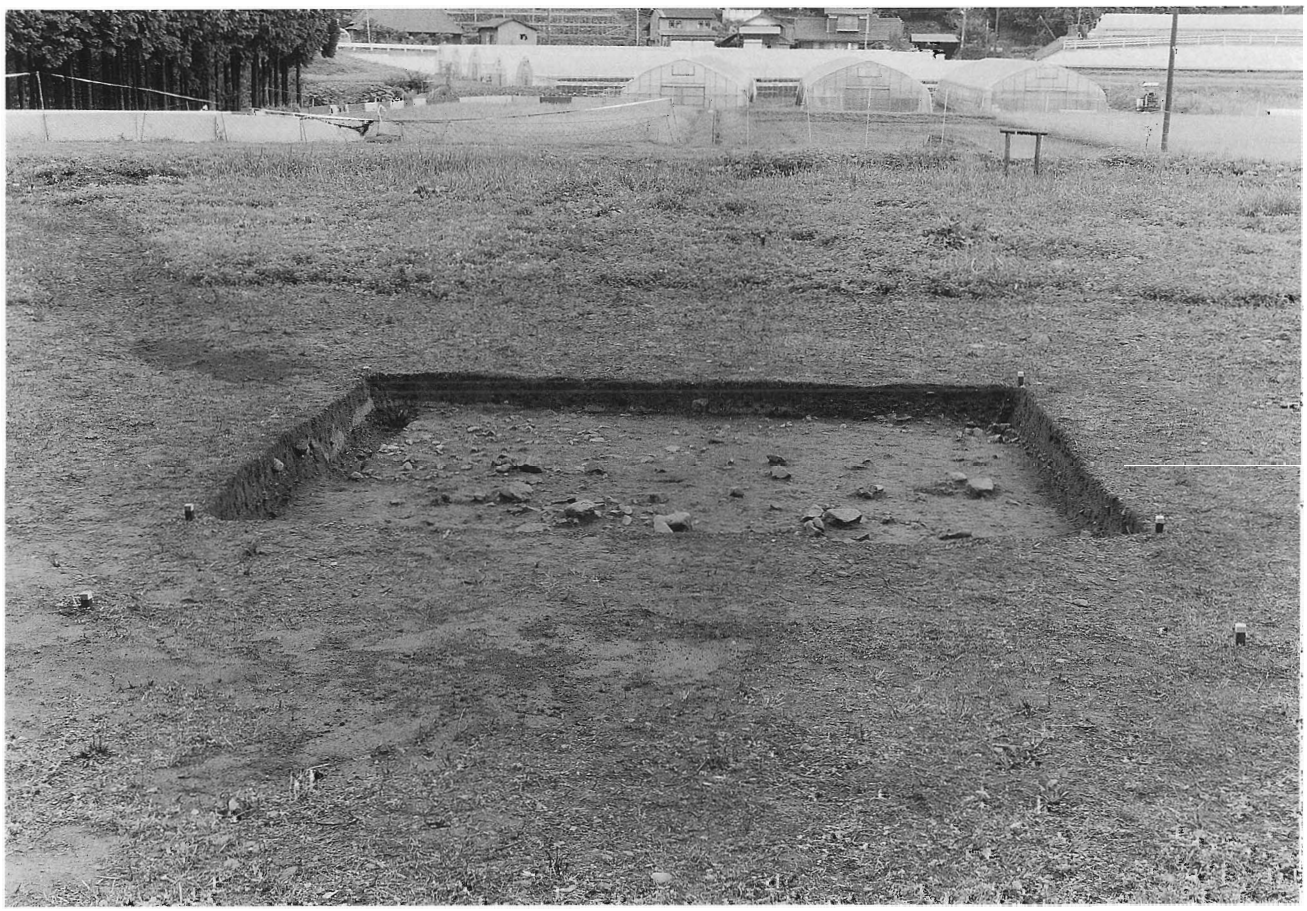
図　　版

遺跡遠景（北側より）

遺跡近景（南東側より）

図版 2

調査区設定状況（南東側より）



調査区全景（南東側より）

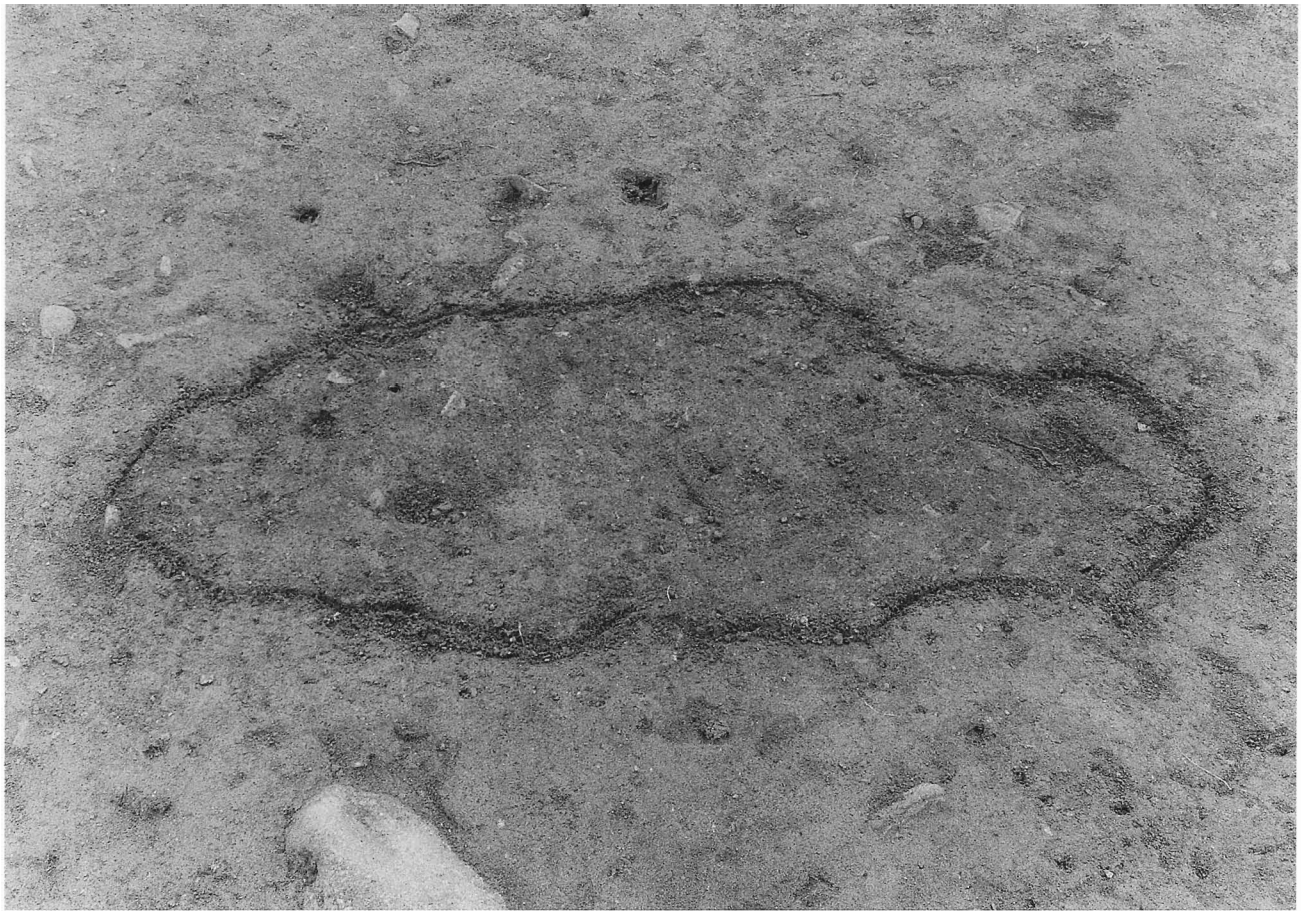
調査区北東壁セクション（南西側より）

調査区南東壁セクション（北西側より）

図版 4

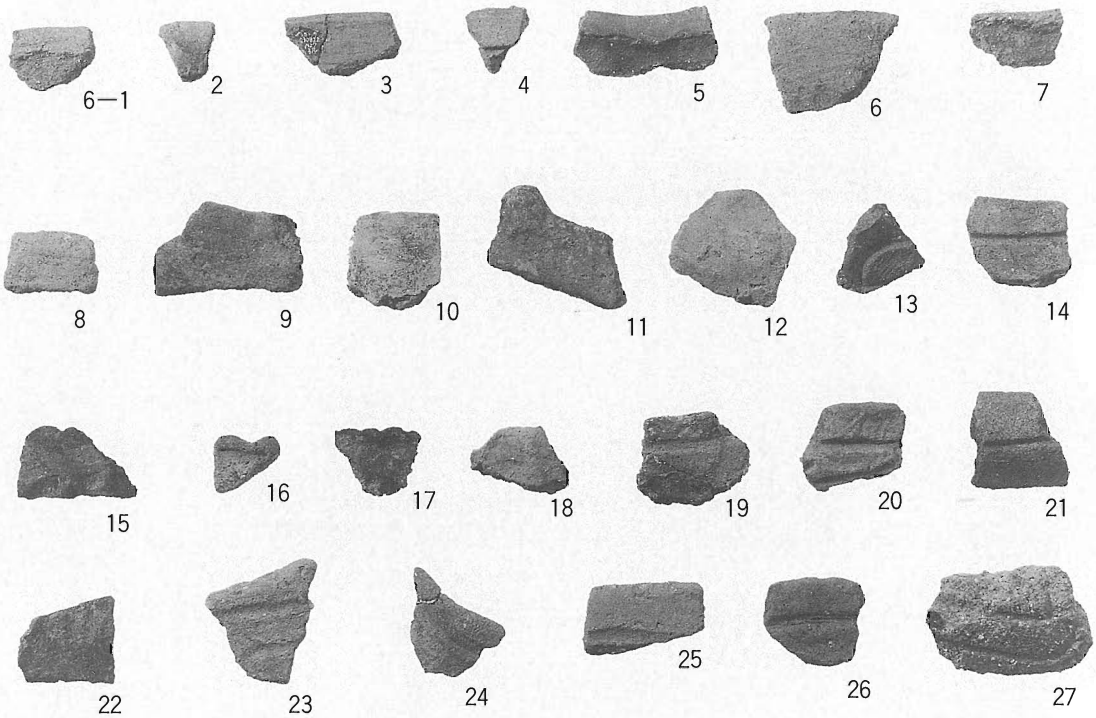
遺構検出状況（南西側より）

遺構完掘状況（南西側より）

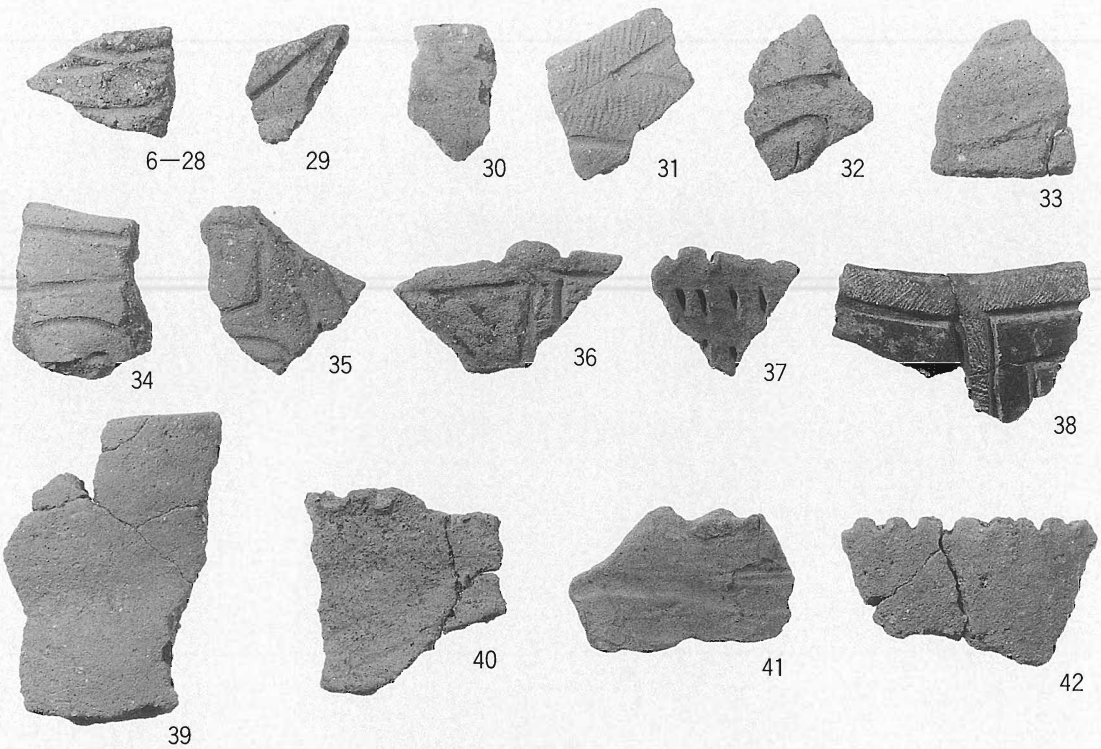


SK－01検出状況（南西側より）

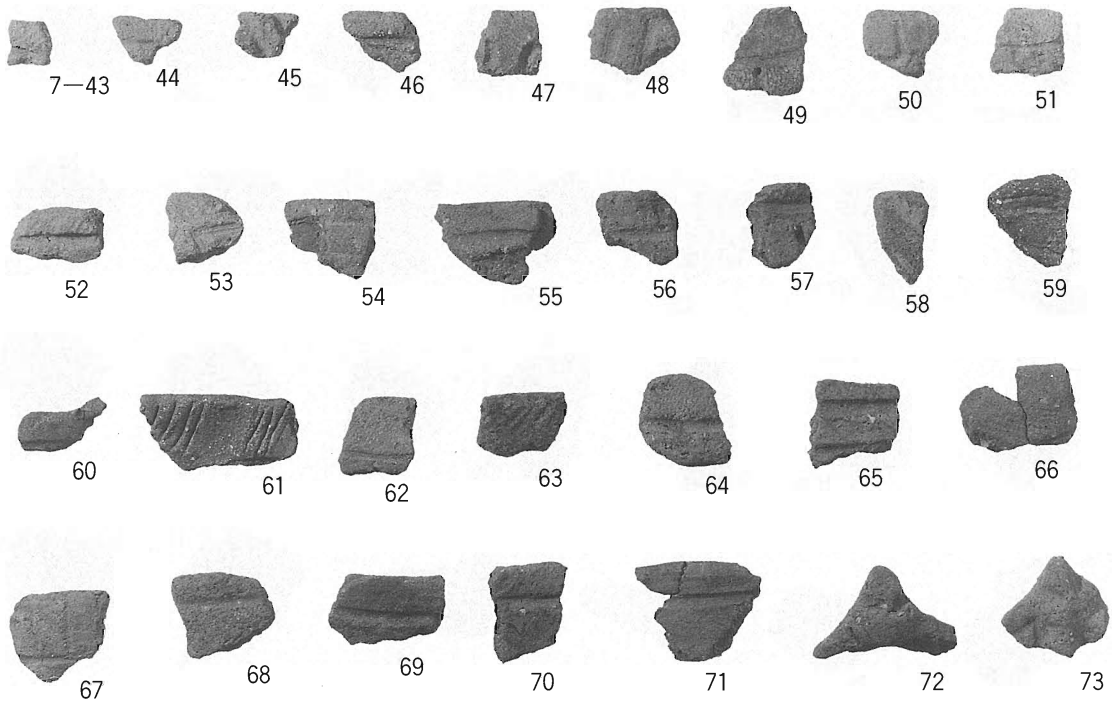
SK－01完掘状況（南西側より）


6—1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

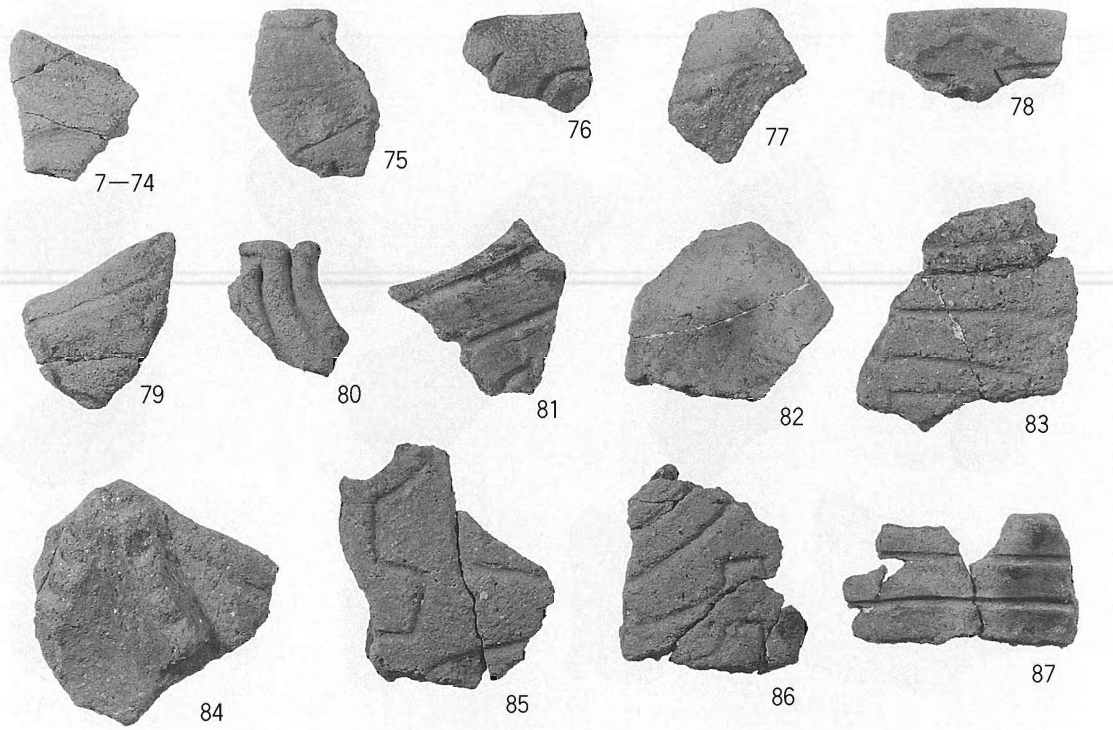
出土土器（1）


6—28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42

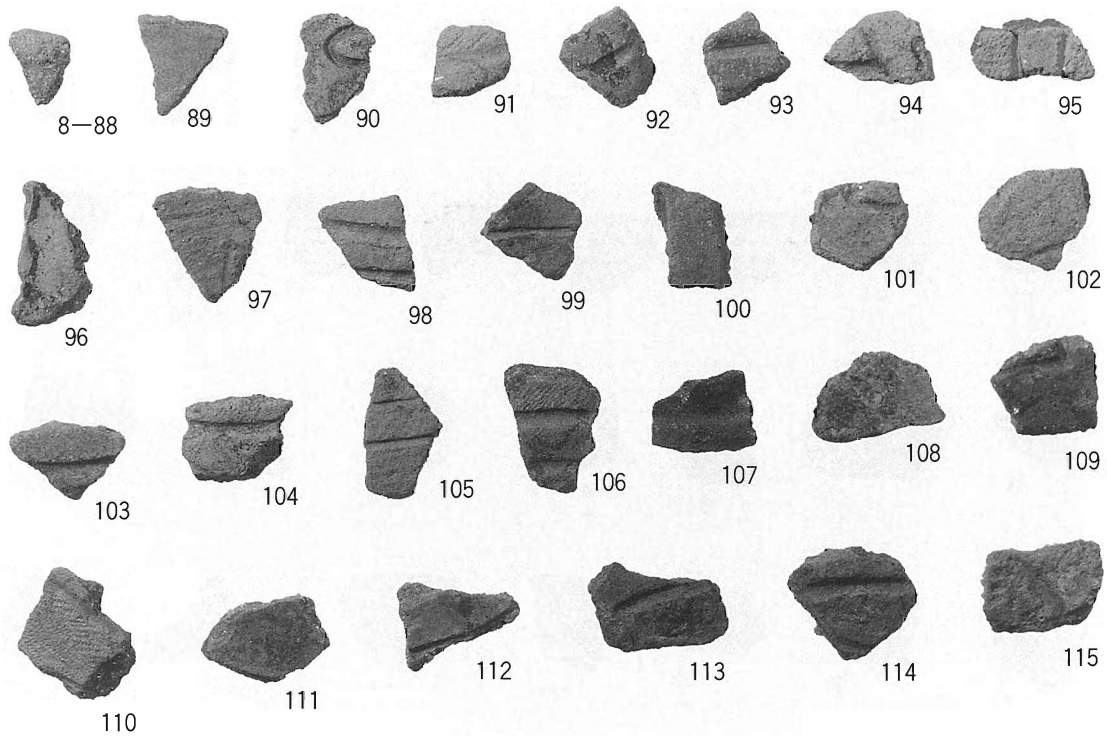
出土土器（2）


7—43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73

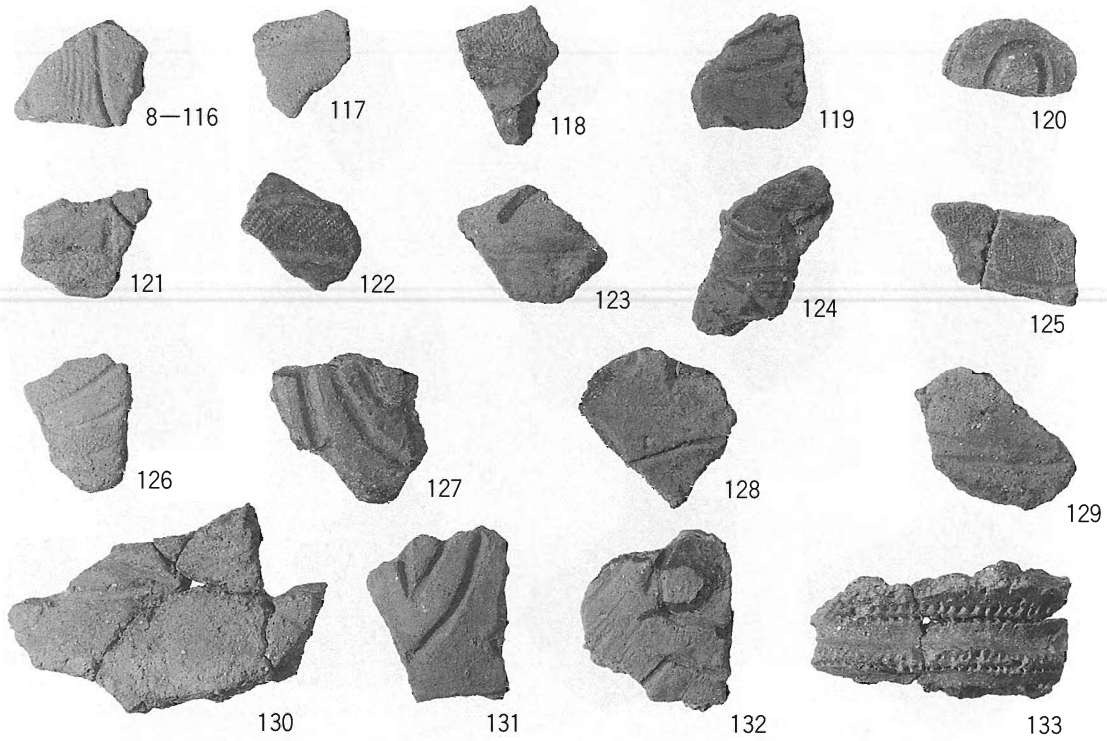
出土土器（３）


7—74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87

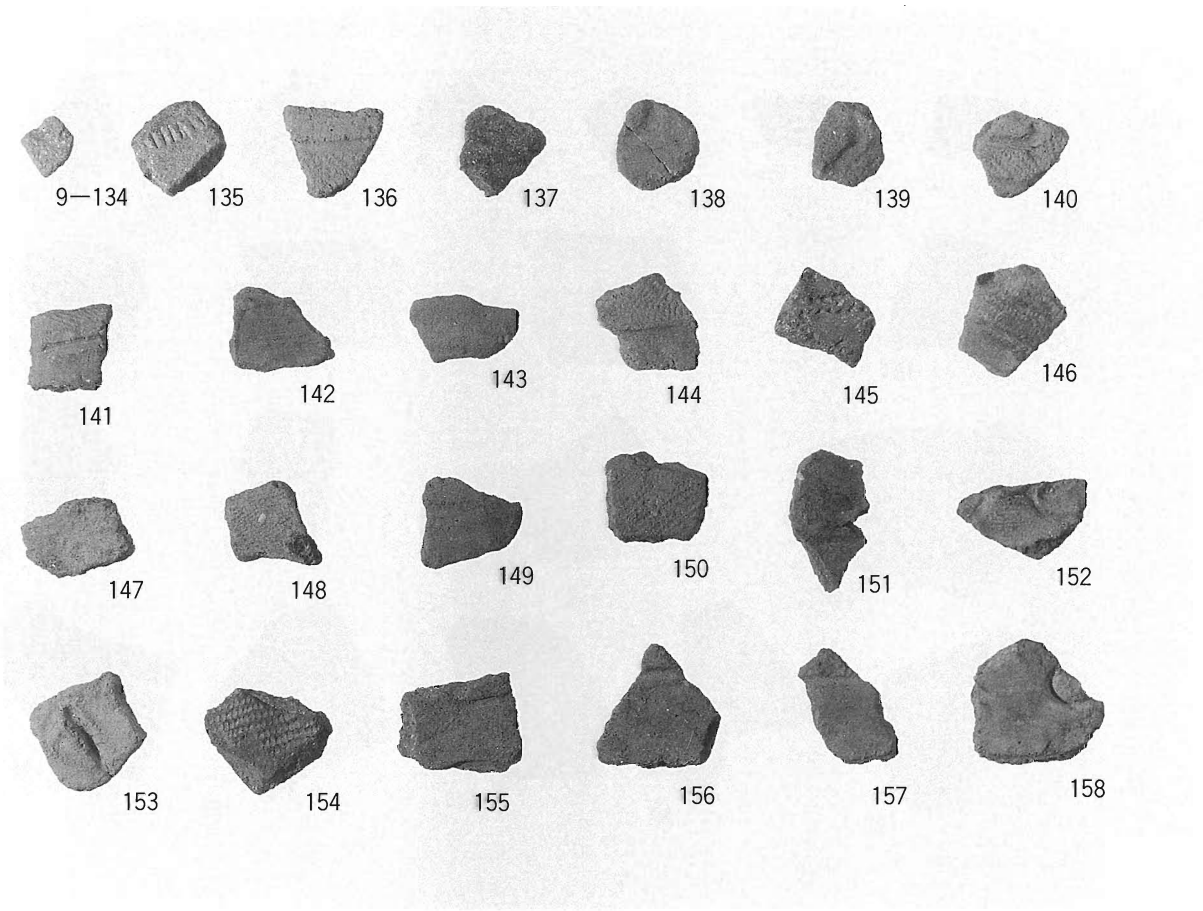
出土土器（４）


8—88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115

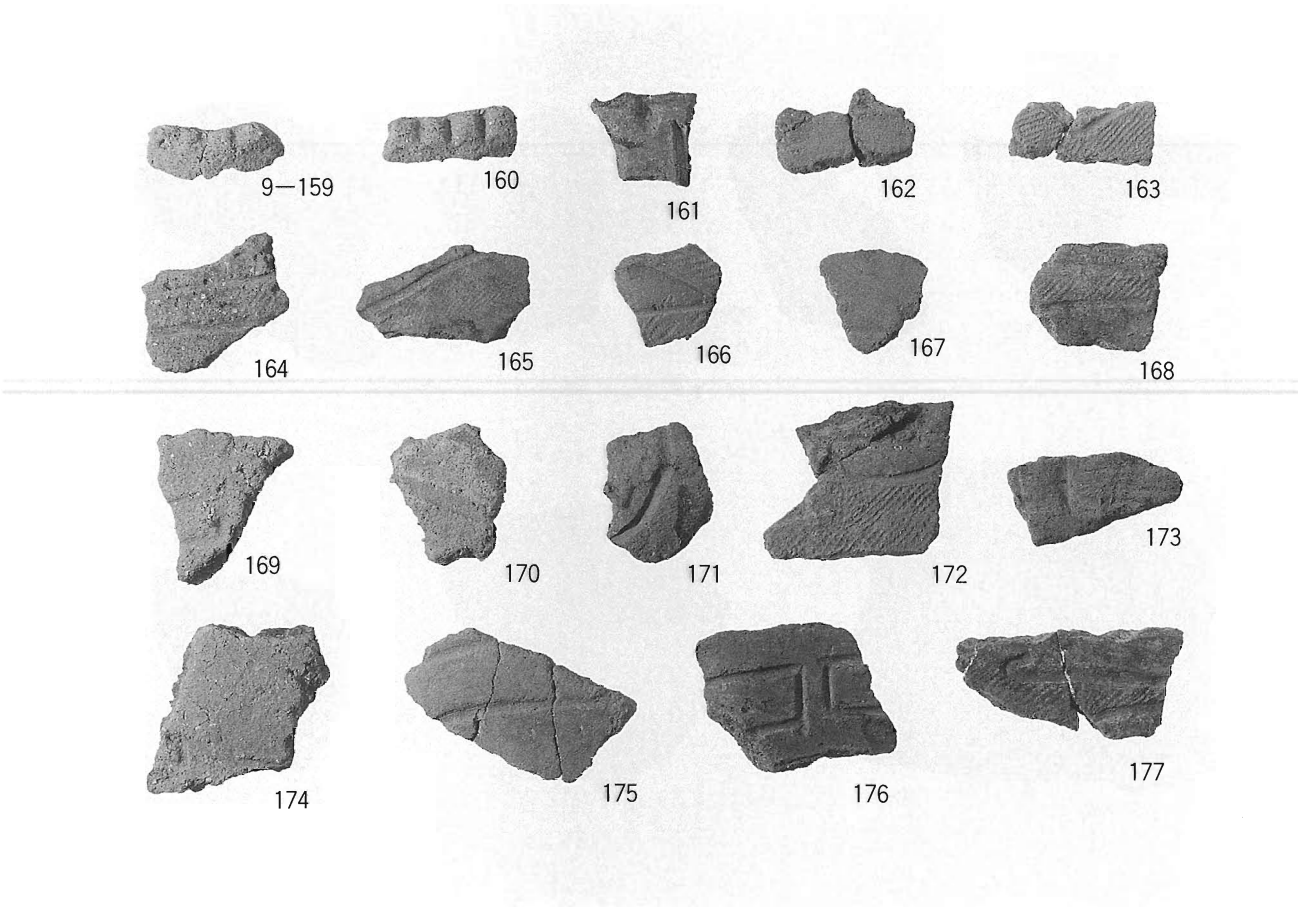
出土土器（5）


8—116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133

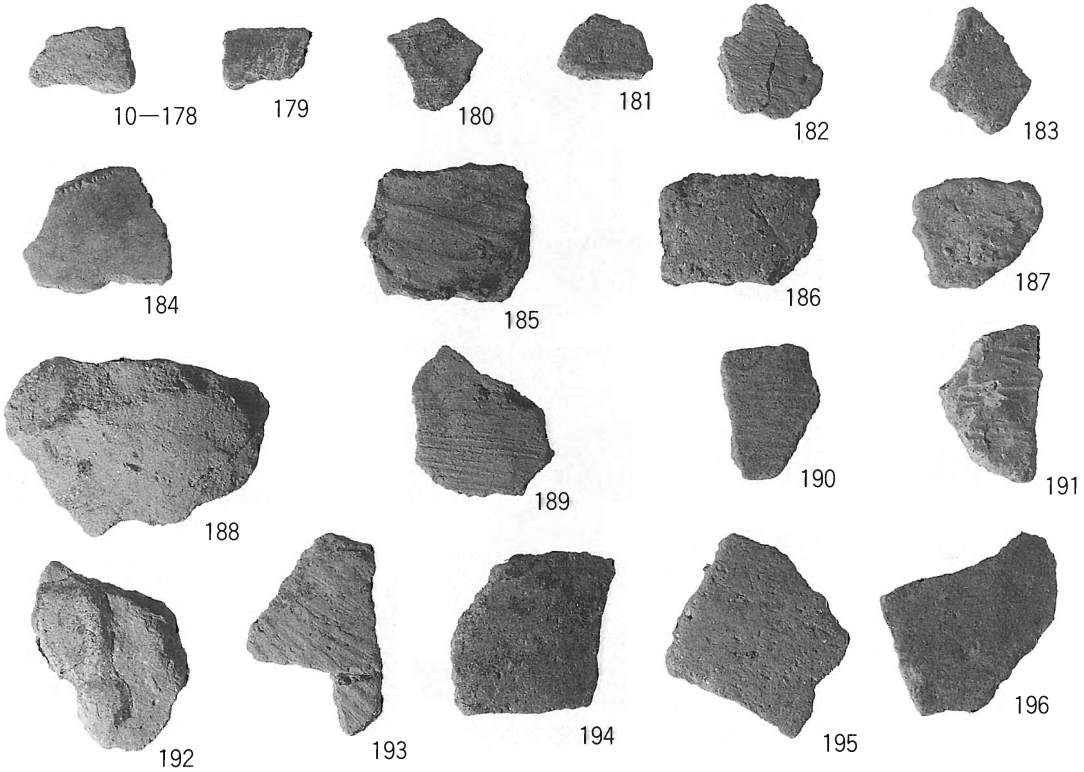
出土土器（6）


9—134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158

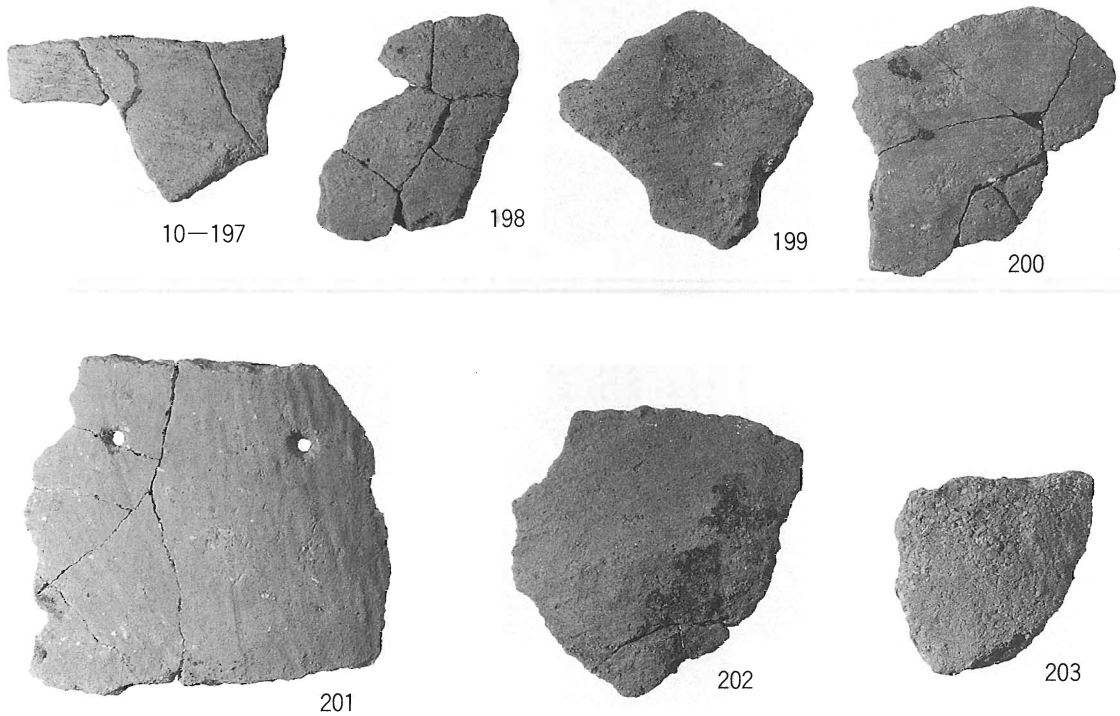
出土土器（7）


9—159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177

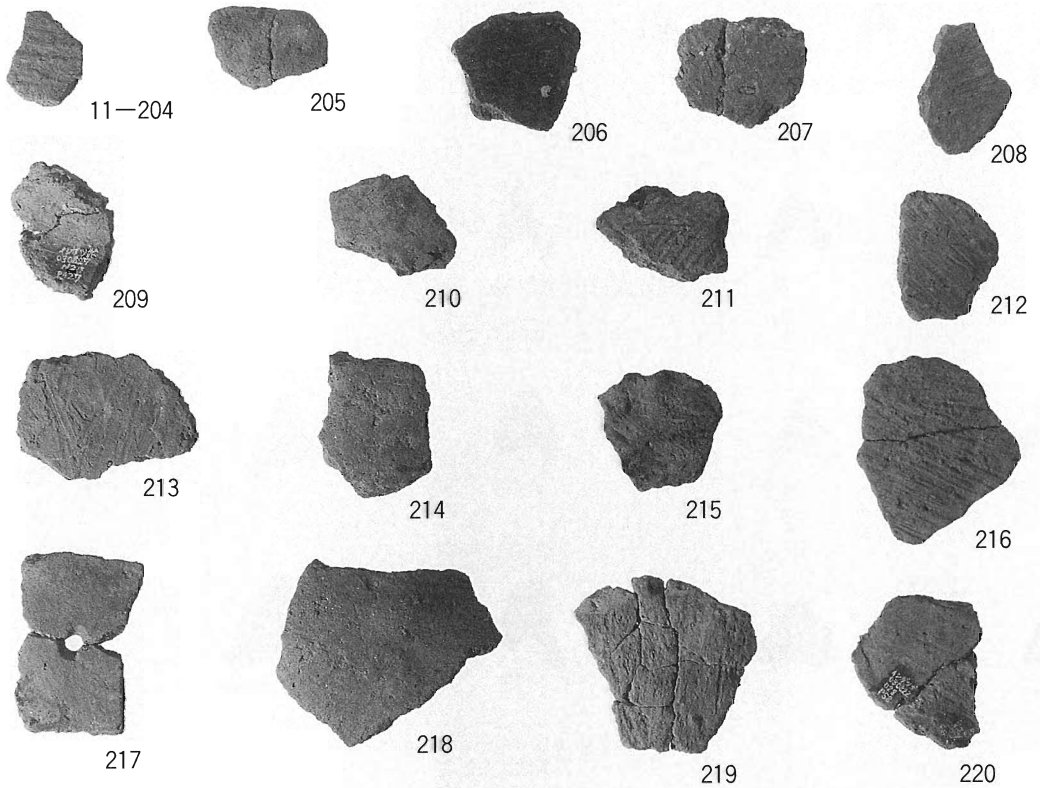
出土土器（8）



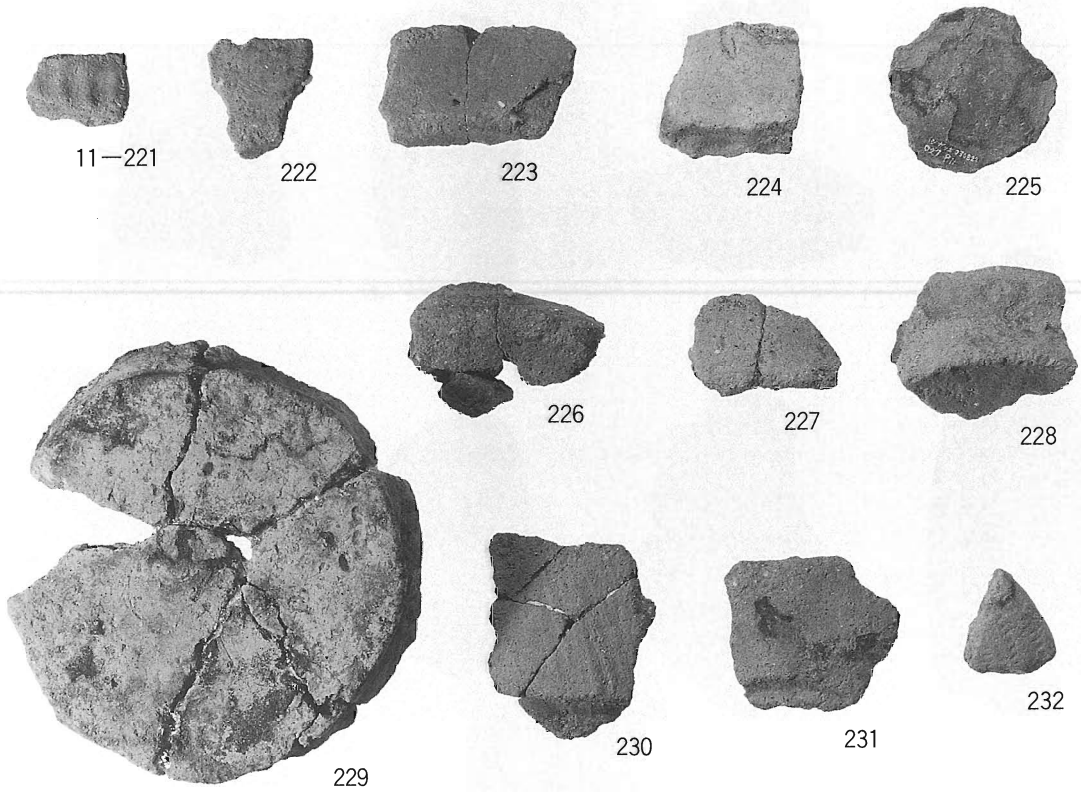
出土土器（9）



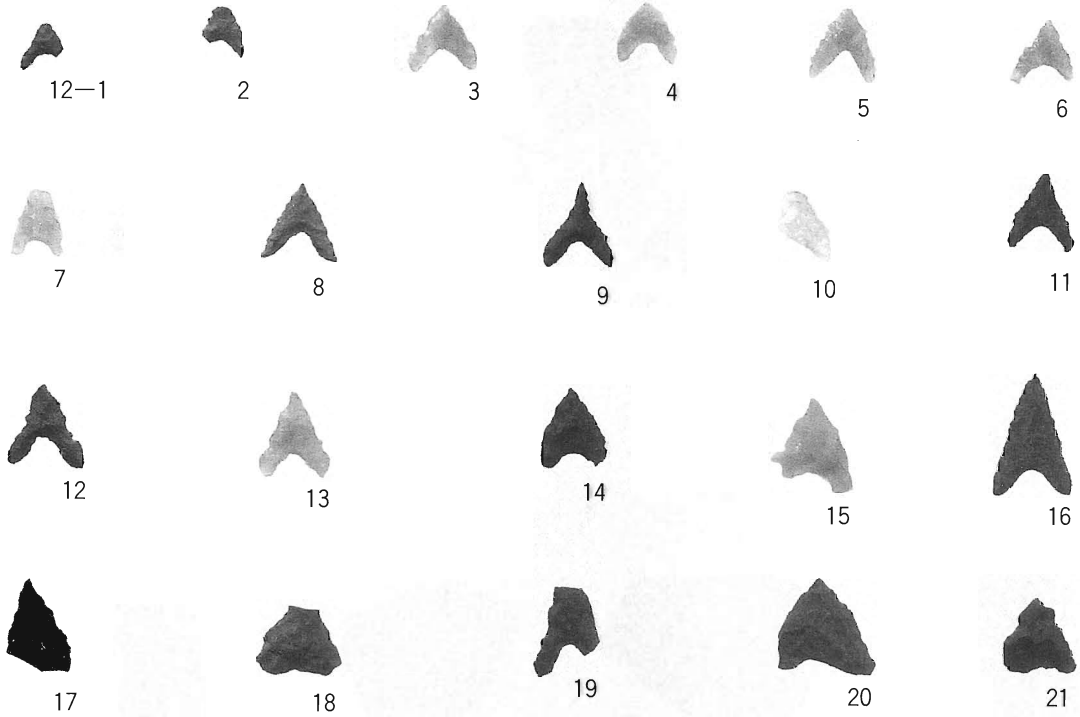
出土土器（10）



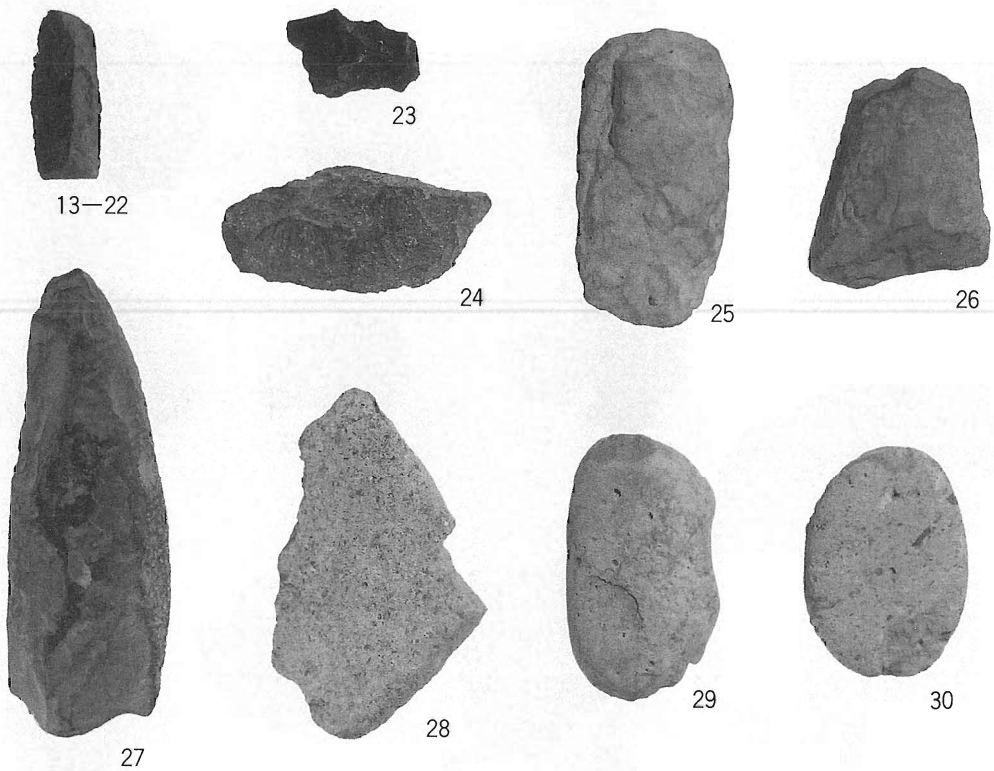
出土土器（11）



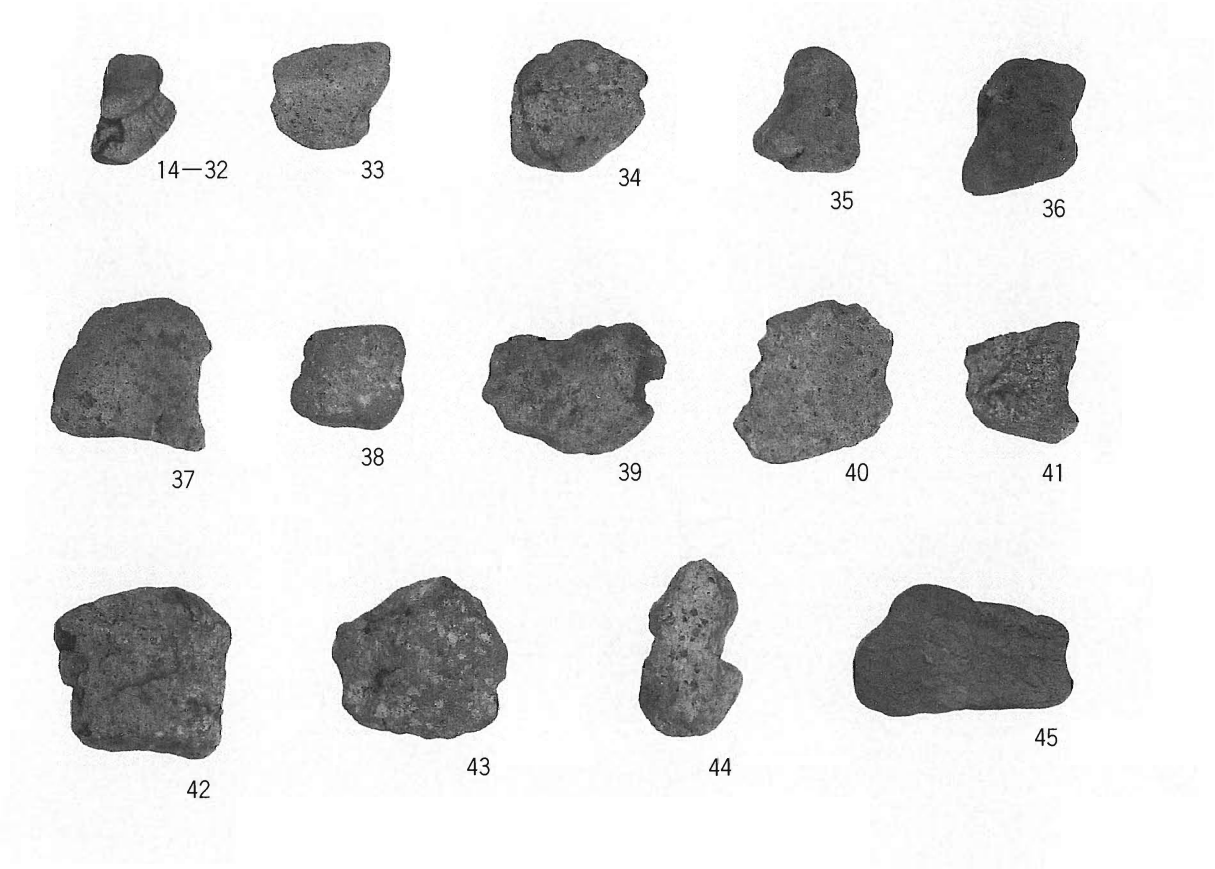
出土土器・土製品


12—1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21

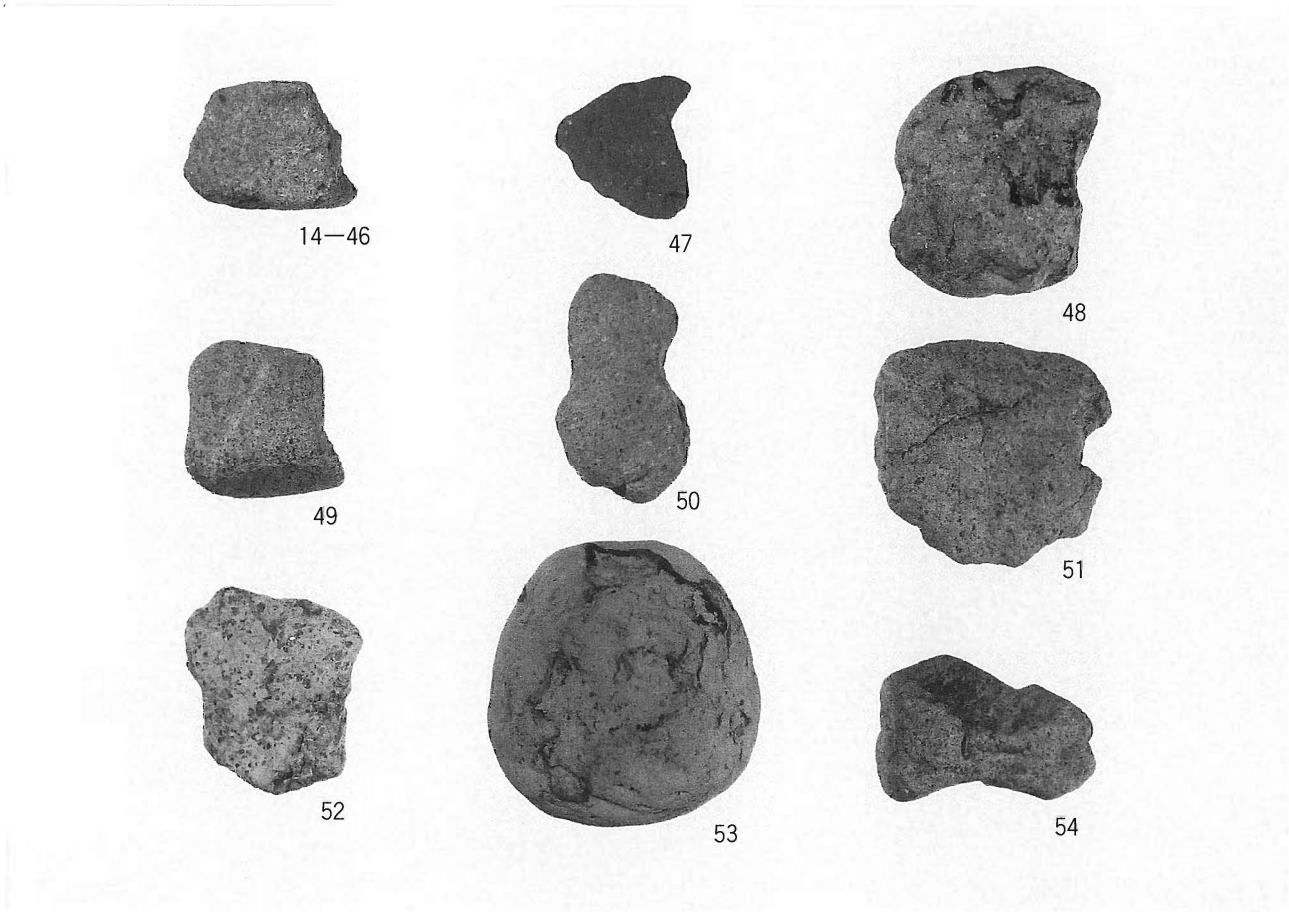
出土石器（1）


13—22
23
24
25
26
27
28
29
30

出土石器（2）


14—32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45

出土石器（3）


14—46
47
48
49
50
51
52
53
54

出土石器（4）

報告書抄録

ふりがな	いしがつぼいせきはっくつちょうさがいほうⅢ
書名	石ヶ坪遺跡発掘調査概報Ⅲ
副書名	
巻次	
シリーズ名	島根大学考古学研究室調査報告
シリーズ号	第6冊
編著者名	山田康弘　厚見　崇
編集機関	島根大学法文学部考古学研究室
所在地	島根県松江市西川津町1060　　tel 0852－32－6194
発行年月日	2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしがつぼいせき 石ヶ坪遺跡	しまねけん 島根県 ますだし 益田市 ひきみちょう 匹見町 しそ 紙祖	32482	52	34度 32分 54秒	132度 00分 20秒	20030818 ～ 20030901	36m²	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石ヶ坪遺跡	生活址	縄文時代	土坑1 住居址1	縄文土器 土製品 石器	

島根大学考古学研究室調査報告　第６冊

石ヶ坪遺跡

発掘調査概報Ⅲ

2005年３月31日

発　行　島根大学法文学部考古学研究室
〒690-8504 島根県松江市西川津町1060
TEL 0852-32-6194

印　刷　有限会社　高浜印刷
〒690-0133 島根県松江市東長江町902-57
TEL 0852-36-9100